

名古屋大学大学院国際言語文化研究科 年報 2012

L

&

E

bulletin

vol. 4

contents

- 02 巻頭言 「天は自ら助くる者を助く」前野 みち子

イベント紹介

- 03 ・国際シンポジウム「福島原発事故をめぐるコミュニケーション」中村 登志哉
04 ・公開講座「芸術におけるオリジナリティとフェイク」藤井 たぎる
05 ・シンポジウム「環境と映像広告」池側 隆之
06 ・国際シンポジウム "Revisiting the Great Depression in American Literature" 長畑 明利

著作紹介

- 07 ・前野みち子・星野幸代・西村正男・薛化元編『侯孝賢の詩学と時間のプリズム』星野 幸代
08 ・河村雅隆著『放送が作ったアメリカ』寺島 工人
09 ・ノーマン・フェアクラフ著 (エドワード・ヘイグ、他訳)『ディスコースを分析する—社会研究のためのテキスト分析』ヘイグ エドワード
10 ・恩田 満著『日本古代文学作品選析』恩田 満

研究報告・近況報告

- 11 ・「スペイン語、ポルトガル語、そして英語で授業する」水戸 博之
12 ・「万葉集の用字法からみえたもの」胡 潔
13 ・「大学専任教員になって」磯野 正典

退任教員挨拶

- 14 ・「のんびりと流れる時間の中で」飯田 秀敏

2012年度オープンキャンパス・ポスター発表

- 15 ・「中国人日本語学習者の音象徴語の理解」飯田 香織
16 ・「Can-do statements の記述に含まれる要素が自己評価に及ぼす影響—「聞く」技能に焦点を当てて」入江 友理
17 ・「マレーシア語の談話小辞kanの機能分化：日本語の文末形式との対比を通じて」勝田 順子
18 ・「量の多さを表す副詞的成分の意味分析—「たくさん」と「たっぷり」」金 奈淑
19 ・「言語接触の観点からみた非有生名詞主語の「見る」構文—文語体コーパスを利用して」高橋 暦
20 ・「中国人日本語学習者による流行語の理解」張 婧緯
21 ・「中国人日本語学習者による動詞複合体の習得における構造の複雑性、難易度及び学習期間の影響」初 相娟
22 ・「ロシア人日本語学習者の依頼に対する「断り」のストラテジー選択に影響する諸要因」マリア・ブラーエヴァ
23 ・「『新撰万葉集』における閨怨詩—和漢比較の視点から」梁 青
24 ・「エリザベス・ギャスケルの作品に見る母と娘の関係—沈黙の声と天使の仮面」木村 正子
25 ・「王韜『淞隱漫録』に見る女性像」黒川 由希
26 ・「“メディア・リテラシー”は大学でどう教えられているか」近藤 尚
27 ・「莫言と大江健三郎の文学における救済」趙 静
28 ・「谷崎潤一郎文学に見られる中国人の身体—「支那趣味」作品群を読む」陳 玲
29 ・「ラフカディオ・ハーン (小泉八雲) (1850 - 1904) のシンシナティ時代 (1874 - 1877) の新聞記事研究」中井 孝子
30 ・「マルチチュードが開く主体の新たなかたち」浜島 清美
31 ・「Invisibility of Literary Translators in France and Japan」イザベル・ピロドー
32 ・「中朝新聞報道をめぐるニュースフレーム比較分析」朴 香花
33 ・「アーネスト・ヘミングウェイにおける太平洋横断的考察」柳沢 秀郎
34 ・「速聴トレーニングによるリスニングの全体的処理能力と分析的処理能力の促進」梶浦 真由美
35

2011年度提出修士論文題目一覧

36

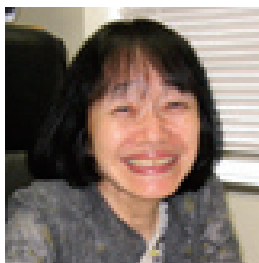
2011年度提出博士論文題目一覧及び要旨

- 38 ・「中国・西双版纳タイ族における出産の医療化と女性たちの選択」磯部 美里
39 ・「日本語存在・所有表現の認知言語学的研究」大西 美穂
40 ・「感情を表す形容詞の意味分析」加藤 恵梨
41 ・「日本語の談話における視点の一貫性と言語理解・言語運用との関わり—台湾人日本語学習者を中心に—」魏 志珍
42

「天は自ら助くる者を助く」

前野 みち子

(国際言語文化研究科 研究科長)



国際言語文化研究科が設置されてから今年度でもう15年目、人間で言う青春時代の入口、というところだろうか。まだまだこれから大波小波、色々な体験を積んで、荒波を被ってもちょっとやさそとではびくともしない、そんな大人になるには大分かかりそうな気もするし、組織としてはやはり虚弱なところもあって、どこかで芯を補強する必要もあるように思う。でも、さすがに15年というと、修了生の数が大分増えて、その方たちが今や世界に羽ばたいていることを知る機会も多くなった。

とりわけ、本研究科を修了して帰国した方たちからひょっこりメールが舞い込んだり、あるいは風の便りに活躍している噂が入ってきたりすると、ああ、みんなそれぞれ頑張っているんだなと思って嬉しくなる。わたし自身が指導した博士学位取得者もすでに8名、そのうち留学生が6名もいる。そして、それに続きたいと必死に頑張っている在籍生も何人か。

わたしの指導生の場合、後期課程の3年目、4年目になって漸く走り出す学生が多い。それも始めはのろのろの助走で、走るフォームもできていないし、ゴールもはっきり見えていない。ちょっとちょっと、どこを向いて走ってるの？とカットを入れて軌道修正しなければならないこともままあるし、自分でそれと気づかずに無駄な道草を喰って、そんなところで時間を使っても大したもののは出てこないから、さっさと切り上げて先へ走りなさい、と叱ることもしばしばある。こうして長距離ランナーたちは助走から脱けだして、自分の、自分らしい走りを見出し、こちらがあれよあれよと思っているうちに、まっしぐらに脇目もふらずゴールを目指し始めるのである。そうになったらもう指導教員は楽なものである。ランナーたちは目の色も顔つきもすっかり変わってしまって、ゴール近くでは、「先生、邪魔だからそこをどいて！」とは言わないまでも、

わたしがコース周辺をうろうろしているものならはね飛ばしそうな勢いである。そういう時期の彼女たち(わたしの指導した、指導している学生には、幸か不幸か、これまで男子学生が一人もいなかった)は本当に輝いている。

わたし自身の大学院時代の記憶は奇妙に宙ぶらりんでぼやけている。研究は好きだったが、教員の指導も博士論文のような目ざすべきゴールもなかったから、資料を読んで書きたいことが溜まってくると、評価の高い先行研究からヒントを得て見よう見まねで論文に仕上げる、という毎日だった。おそらく、当時の日本の人文系大学院生の多くが同じような状況にあったのではないかと思う。

そんなわけで、わたしが一番困るのは、「恩師はどなたですか」と問われることである。「いません」と正直に答えると驕慢の謗りを受けるかもしれないが、事実そうなのである。だからわたし自身も、自分が指導した学生に、「恩師」だと思ってほしくはないし、彼女たちを「弟子」だとも思っていない。わたしが本当にほしいのは、研究が好きな若い仲間である。彼女たち、あるいはこれから出てくるかもしれない「彼ら」も含めて、関心を共有し、共通のテーマについて侃々諤々議論しながら、教えることもあれば、教えられることもある、そういう若い仲間となる修了生たちである。

先日、二年前に中国に戻った修了生からメールが入った。研究滞在を支援する国の奨学金に応募したいとのことだった。研究テーマはぴったりわたしの関心にも合っている。すぐ受入に必要な書類を作成して添付ファイルで送った。本当に来られるかな、来れたらいいな、と今から楽しみにしている。

とはいえ、つい先ほど、お世話になったことのある編集者に、「先生、今は何をやっていらっしゃるんですか？」と訊かれて返事

に窮したばかりである。わたしは慌ててこう口走ってしまった。「済みません、今はほとんど何も……、ご免なさい。」先方にしてみれば、謝られて当惑されたと思うが、残念ながら今はまあ休業中に近い。

そんな恥ずかしい思いで研究室に戻ったとき、今やまっしぐらにゴールを目指し始めている学生からメールが入った。「件名」に「天は自ら助くる者を助く」とある。明治初期に小学校教科書としても使われたサミュエル・スマイルズ著、中村正直訳『西国立志編』の序文にあるこの言葉を借りて彼女が報告してきたのは、博論の二つの章を完成させるために探し続けていた重要な資料の欠落部分が、幸運にも最近その資料が復刻されたので手に入る見込みがついた、という一大ニュースだった。そう、一生懸命頑張っていると必ずいいことがあるね、と早速返信を出してから思った。わたしも自分で自分を助けなければ、誰も助けてはくれない。そして、修了生・在學生との真の連帯も、互いにSelf-Helpの精神があつてこそなのだ、と。

イベント紹介

国際シンポジウム 「福島原発事故をめぐるコミュニケーション」

中村 登志哉 （国際多元文化専攻 メディアプロフェッショナル論講座教授）

国際言語文化研究科メディアプロフェッショナル論講座は2012年2月3日（金）、文系総合館カンファレンスホールにおいて、研究科プロジェクト「メディアと外交」（研究代表・中村）の一環として、「福島原発事故をめぐるコミュニケーション」と題したシンポジウムを、内閣官房、中日新聞社、河北新報社、共同通信社の協力を得て開催した。



報告をする加古陽治・東京新聞社会部次長

チェルノブイリを超える大規模災害となった福島第一原子力発電所事故の発生に際して、日本政府が国外に向けてどのような国際コミュニケーションを取ったかを、政府とメディア側双方の立場から検証することが日本の今後の外交を考える上で重要だとの私の問題提起に対して、日本政府の国際広報責任者として国際メディアの対応に当たってきた四方敬之・内閣副広報官（総理官邸国際広報室長）は、当初の日本人への共感と称賛が、次第に日本政府と東京電力の対応能力に対する批判的論調へと変化していったことを報告した。

英文ニュースも配信する共同通信社の会田弘継・編集委員室長も、米政府を情報源として事態の深刻さを強調する英文報道に対し、事故を過小評価しがちな日本政府発の情報との溝の大きさが日常的悩みだと語った。

原発事故報道に関しては、国内各紙の中で最も積極的であると事故後一貫して高い評価を受けてきた東京新聞（中

日新聞東京本社発行）の加古陽治記者も、国民がパニックに陥ることへの過度の恐れから、政府は情報を公開する姿勢に欠けたのではないかとの問題点を指摘した。

一方、直接の事故現場で活動する河北新報の早川俊哉・福島総局長は、放射性物質の飛散予測システムのデータがより速く公表されていれば、被曝せずに済んだ住民も少ないはずだと指摘し、事故以来一貫して福島にとどまり、事故の直接的被害者を読者に多く持つ地元紙としての思いを明らかにした。

シンポジウムは大震災・原発事故の発生から1周年を目前に迎えた時期の開催で、広い関心を集めた。討議の様子は、全国紙や中日新聞、中京・東海テレビで報道されたのをはじめ、NHK国際放送（英語）のニュース番組において5分間の特集として放送され、世界に向けて放送された。独自にツイッターで発表を＜同時中継＞された意識の高い参加者もいた。

各パネリストの発表内容やパワーポイント資料は同年3月に報告書として刊行されたほか、平成23年度外部評価委員会においては、本シンポジウムが重要なテーマを迅速かつ包括的に取り上げていて、社会への還元性が高いと過分の評価を頂いた。開催にご協力頂いた本講座、研究科の関係の皆さんに改めてお礼申し上げる。

公開講座 「芸術におけるオリジナリティとフェイク」

藤井 たぎる （国際多元文化専攻 先端文化論講座教授）

国際言語文化研究科は愛知県立芸術大学と連携し、2008年以降、毎年、シンポジウム、講演会、ワークショップなどさまざまなプロジェクトを行ってきた。2008年は「現代日本の音を求めて: From the Sound - To the Sound」(作曲家下山一二三を招聘したこのイベントについてはL&C 2009, Vol. 1, 10ページ参照)、2009年は「戯れのテクノロジー: 音楽の戯れ」、2010年は「境界の消失と再生: 現代音楽の諸相」がテーマであった。また2010年には愛知芸術文化センターとの共催で、公開講座「J-Pop 観賞術」を開催した。

このうち、2010年の「境界の消失と再生: 現代音楽の諸相」では、バトラー大学(インディアナポリス)教授で作曲家のマイケル・シェリーによる基調講演とそのテーマに基づいたシンポジウムやコンサートが行われたが、この場で提起された問題をさらに深く掘り下げ、あらたな展望を得る機会が早くも翌年の2011年に訪れた。

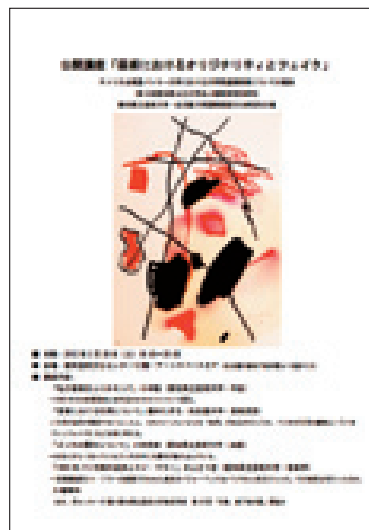
2011年11月9日から14日まで、バトラー大学芸術学部(JCFA)との共同企画による講演、パネル・ディスカッション、コンサート、講義が、バトラー大学とインディアナ大学(ブルーミントン)で行われ、愛知県立芸術大学から小林聡教授(作曲)、小林英樹教授(油画)、井上さつき教授(音楽学)が、名古屋大学から藤井たぎるがこのプロジェクトに参加した。

マイケル・シェリー教授のコーディネートによる講演シリーズでは芸術におけるオリジナリティとフェイクの「境界」に焦点が当てられ、私たち4名とバトラー大学側から4名が、それぞれの専門の立場から芸術概念の再検討とポスト産業資本主義社会における芸術のあり方について論じた。

今回の公開講座は、2012年2月28日(火)18時45分から20時45分まで、愛知芸術文化センター 12階アートスペースEFを会場とし、インディアナポリスで行った講演を成果報告も兼ねて、市民を対象に再現したものである。時間の都合もあり、インディアナポリスでの講演をそのままそっくり再現することはできなかったが、私たちがなにを問題として提示し、そこからどのような(とりあえずの)結論を引き出そうとしているのかは、定員50名の会場をいっぱい埋め尽くしてくださったオーディエンスにも十分に伝わったように思う。

作曲家の小林聡氏は、自分にとって「コンチェルトを作曲するのは独奏楽器の新しいテクニックを開発し、独奏楽器とオーケストラとの新しい関係を生み出すことでもある」とし、協奏曲というジャンルの魅力と可能性について語った。代表的な小林作品も抜粋ながら紹介され、強靱だが一瞬たりとも透明さを失わないその独自の音の響きの一端に触れることができた。協奏曲という伝統的な様式にもかかわらず、そのヴィルトゥオジティはもはや過去のどれにも似ていない独創性に満ちたものだった。

画家でゴッホ研究者である小林英樹氏は、ゴッホの名だたる「名画」のい



くつか(今回はワシントン・ナショナルギャラリー所蔵作品)がなぜ贋作とみなされるのかを、造形的な矛盾を理路整然と次々に指摘しながら証明してみた。「神聖にして犯しがたい聖域なので疑惑の目を向けること自体はばかれる」が、それにメスを入れるとき、「初めてゴッホの造形を語ることができる」と氏は言う。もとよりそれができるのは小林氏以外の誰でもないだろう。

音楽学者の井上さつき氏は1900年パリ万博の貞奴とロイ・フラーのパフォーマンスについて、「日本のオリジナルそのままではなく、ジャポニスムに合わせてオリジナルを作り変えた川上一座の日本音楽芸能と、ジャポニスムに触発されて生まれたアル・ヌーヴォーのミュージックであるロイ・フラーの前衛舞踊からなるプログラムは単なる寄せ集めではなく、「世紀転換期から1930年代のヨーロッパにおけるさまざまな芸術や運動の結節点」において、二人の舞踊はいずれも「新しい道を切り開くものであった」とし、オリジナルとフェイクの狭間にこの新しい舞踊をしなやかに位置づけてみせた。

藤井たぎるはインディアナポリスでの講演(そのときのタイトルは「欲望の対象-原因としての調性」)とは異なるテーマを扱った。イタリアの作曲家ルチアーノ・ベリオのカラーズ作品「シンフォニア」におけるマーラーほかの「引用」について紹介したあと、マイケル・シェリーの近作のピアノ曲「ストレート、ノー・リチウム」で、バッハの前奏曲がいかに脱構築されながら、21世紀の匠匠を纏ってふたたびスリリングに立ち現われるかを、実際に音楽を聴きながら解説した。

2013年には、愛知県立芸術大学が「アーティスト・イン・レジデンス」としてマイケル・シェリー教授を招聘する予定と聞いている。そのときはまた、有意義な連携プロジェクトを企画したいと思う。

シンポジウム 「環境と映像広告」

池側 隆之（国際多元文化専攻 メディアプロフェッショナル論講座准教授）

大学院国際言語文化研究科メディアプロフェッショナル・コース及び名古屋大学グローバルCOEプログラム「地球学から基礎臨床環境学への展開」は、2月10日（金）、野依記念学術交流館において、シンポジウム「環境と映像広告」を開催しました。日本海洋学会青い海助成事業の支援を受け、環境学分野と映像メディア分野の合同で行われたシンポジウムでは、特定の環境や課題を身近に感じてもらうためのコミュニケーション手法の中から、特に映像広告に焦点を当て、その変化と展開及び課題と展望について考えました。

経済発展と常に隣り合わせに存在する環境問題は、「1. 視覚・感覚に訴えない（Hidden from senses）」、「2. 影響を感じるのに時差がある（Time-hidden）」、「3. リスクの及ぶ範囲が大きすぎる（Scale-hidden）」などの要因から、今日ではますます共有しづらい状況下にあるといえます。そんな中、昨今私たちは「環境コミュニケーション」という言葉をしばしば聞くようになりました。環境コミュニケーションとは「環境面から持続可能性に向けた、政策立案や市民参加、事業実施を効果的に推進するために、計画的かつ戦略的に用いられるコミュニケーションの手法あるいはメディアの活用」（OECDによる定義）を意味します。2010年度より池側は、環境学研究科・山下博美特任准教授と、この環境コミュニケーションを考える協働プロジェクトをスタートさせました。そこには、単に一方的にメッセージを伝達するのではなく、環境が今どういった状況に置かれ、それと私たちがどう関係しているのかを知る術として、映像メディアの有用性を検討する、という問題意識がありました。その実践は、大学院授業「フィールド情報編集論」の中で展開され、干潟のフィールドワークを軸とした映像制作研究を2年間行ってきました。そして、その実践報告と今後の展開を検証するのが今回のシンポジウムの狙いだったわけです。

当日は、広告の仕組みを社会貢献に活かすため40年前に設立されたACジャパン（旧公共広告機構）の江川建男名古屋運営委員会副委員長が、歴代の環境に関する映像広告とその社会背景の考察を行い、また様々なメディアを駆使して社会マーケティングに取り組むマエキタミヤコ サステナ代表が、「市民語」の使

い方を含めた環境メッセージ伝達におけるコストと映像発信の可能性について講演されました。さらに本学からは、山下特任准教授が、環境コミュニケーションのアプローチについて紹介し、池側と「フィールド情報編集論」受講の本研究科大学院生が、エスノグラフィック・リサーチに基づいた研究成果として、昨年度より展開している干潟の環境広告制作についての発表を行いました。

シンポジウムには、メディア、企業、環境保全団体、行政、大学関係者、一般市民など多様な分野から約100名が参加し、来場者からは「環境とメディア分野の融合が新鮮で多く考えさせられた」、「環境広告制作の教育的意義を感じた」等の声が聞かれました。また当日は、ACジャパンから発信された様々な環境公共広告の中から厳選された、1995-2011年の作品を数多くお借りすることができ、これらを野依記念館内において展示・上映する好機を得ました。

シンポジウムが終わった3月と6月には、2年間の成果を、日本海洋学会と日本映像学会の年次大会において発表し、それを下地としながら、2012年度中に、メディアプロフェッショナル論講座が発行している学術誌『メディアと社会』第5号においても、その成果を論文として公開する予定です。今後も環境学研究科との協働作業を継続していきたいと考えています。



国際シンポジウム

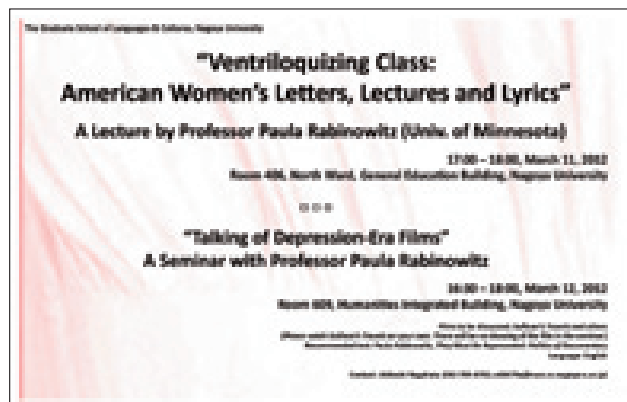
“Revisiting the Great Depression in American Literature”

長畑 明利 (国際多元文化専攻 アメリカ言語文化講座教授)

国際言語文化研究科は設立以来アメリカ文学・文化を研究する教員・大学院生を擁してきたが、このたび、博士後期課程在籍の大学院生と修了生、そして、教員が中心となって「名古屋アメリカ文学・文化研究会」という名の研究会を立ち上げた。この研究会は、ゲスト・スピーカーによる講演会、シンポジウムや研究集会、論集の発行などを通じて、メンバーのアメリカ文学・文化についての研究を深め、また、名古屋地域のみならず、ひろく国内外の研究者のために有意義な意見交換の場を設けることを目的とするものである。

設立以来、当研究会では、定期的に研究発表会を開催しているが、それに加え、初年度(2011～12年)には、海外から講師を招いて、講演会とシンポジウムおよびセミナーを開催した。まず、12月18日には、シドニー大学で教鞭を執る Mark Byron 氏による講演会 “In a Station of the Cantos: Ezra Pound’s ‘Seven Lakes’ Canto and the Sho-Sho Hakkei Tekagami” を開催した。バイロン氏は Samuel Beckett や Ezra Pound をはじめとする 20 世紀英米文学の研究を精力的に進めている若手研究者であり、今回の講演では、パウンドの大作 The Cantos 中の一篇「詩篇 49」についてお話しされた。この詩は、パウンド家が所有していた屏風絵に描かれた「蕭蕭八景」図をモチーフとするもので、バイロン氏はその屏風のレプリカを披露しつつ、また、スライドに画像を映し出しながら、詩の言葉と図の対応などについて精緻な解説をされた。講演に続く質疑では、上記研究会のメンバーを含む研究科内外の教員・大学院生との活発な意見交換が行われた。

2012年3月11日には、基調講演者として、ミネソタ大学の Paula Rabinowitz 教授を招いて、国際シンポジウム “Revisiting the Great Depression in American Literature and Culture” を開催した。このシンポジウムは、長い不況にあえぐ日本の状況と比較されることもあるアメリカの大恐慌時代を採り上げ、その時代に生まれた文学と文化について再検討することを目的とするものである。ラビノウィッツ教授は、アメリカ文学・文化、映像研究、フェミニズム等の幅広い領域で活躍しておられるが、とりわけ、労働者階級の女性による、あるいは、それらの女性をテーマにした文学・文化の研究で知られる研究者である。シンポジウムでは、まずはじめに、大恐慌時代をめぐる 2 つのセッションが行われ、上記研究会に属する大学院生・修了生、そして、教員による 9 件の発表が行われた。それぞれの発表にはコメンテーター役を務め



られたラビノウィッツ教授から鋭いコメントがなされ、それに続いて、参加者によるディスカッションが行われた。発表者の中には、英語で行われる研究集会で初めて発表する大学院生もあり、それらの院生にはとりわけ有益な経験になったものと思われる。

続いて行われたラビノウィッツ教授による基調講演は、“Ventriloquizing Class: American Women’s Letters, Lectures and Lyrics” と題され、主として、1930年代に活躍した二人の女性詩人 Tillie Olsen と Muriel Rukeyser の作品を論じるものであった。アメリカでもよく読まれてきたと言い難い女性詩人による、労働者をテーマとする作品を論じる講演内容は、Labor and Desire: Women’s Revolutionary Fiction in Depression America という著書も書かれているラビノウィッツ教授の研究姿勢を如実に反映するものに思われた。また、講演の最初に、ちょうど1年前に起こった東日本大震災で被害を受けた人々へのお見舞いの言葉があったことも記しておく。

翌3月12日には、ラビノウィッツ教授によるセミナー “Talking of Depression-Era Films” が行われた。このセミナーは、主として大学院生を対象とし、大恐慌時代の映画を題材に、大衆文化の分析方法の一例を学ぶことを目的とした。セミナーは比較的自由な意見交換の場となり、大衆文化について、また、大恐慌時代の映画について、出席者との間で、有意義な意見交換がなされた。

ラビノウィッツ教授は所属する学部や学会の運営に関わる仕事にも精力的に取り組んでおられる方で、休憩時間や食事の際に、関連する業務について種々の情報をもたらしてくれた。それらは日本の大学や学会の運営にも大いに参考になるものであった。また、コーヒー・ブレイクやシンポジウム終了後の懇親会の席では、大学院生や若手研究者に研究その他に関する数々の助言をなされていた。今後この催しに参加したそれぞれの院生・研究者の研究に、その助言が生かされていくことを期待したい。

「名古屋アメリカ文学・文化研究会」ウェブページ：
<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~nagahata/nu-alcs/>



前野みち子・星野幸代・西村正男・薛化元編

『侯孝賢の詩学と時間のプリズム』

星野 幸代

(国際多元文化専攻 ジェンダー論講座准教授)

昨年度L & G イベント紹介欄に「台湾映画祭＋シンポジウム「侯孝賢の詩学と時間のプリズム」」を書いたが、本書はこれと関西学院大学で行われたシンポジウムの講演録、及び座談会記録である。出版に当たり、台湾行政院文化建設委員会の出版助成金を得た。

本書とびらには、このシンポジウムに際し、侯監督から特に寄せられた言葉がある。以下に原文を載せておこう。

深度は隠蔽的、藏在哪裡？藏在表面。

這表面對我而言，就是每一個人的、物的「存在感」，我拍電影，一直努力於捕捉並 抓牢這個存在感。

——侯孝賢

訳文（一つの解釈）は本書を参照されたい。

本書は前七編が台湾、日本、香港、アメリカ、カナダにまたがる侯孝賢研究者たちの映画論、後二編が座談会記録になっている。映画論の構成をおおまかに概括すれば、歴史的研究から理論的研究へ、と言えるだろう。

香港バプテスト大学の葉月瑜教授、嶺南大学のD・W・デイヴィス名誉副教授の「朱天文、沈從文とのくめぐりあい」は、台湾ニューシネマ世代共通の自伝的手法をキーワードとし、侯監督映画は、中国1920-30年代の抒情的作家として有名な沈從文の「想像のノスタルジー」への共鳴であると解釈する。

東京大学の藤井省三教授「侯孝賢が台湾百年史映画を創るとき」は、『百年恋歌』の映像テキストを綿密に歴史的に読み取ることにより、普通の若者の恋を描いているかのように見える『百年恋歌』が、実は現在の台湾における「迫りくる国際的孤立化と台湾民主化という大転換期への不安」を語っていると解き明かす。

台湾政治大学の陳儒修教授「二十年後から『悲情城市』再考」は、『悲情城市』の語りと歌に注目し、それらが歴史的な事件と個人的体験を交錯させる役割を果たしていると論じる。

台湾大学の張小虹教授「パリの長境頭」は、『レッド・バールン』のロングテイクを、ドゥルーズ＋ガタリのaffect（情動）等の概念を駆使して分析している。

カナダ・カールトン大学のミツヨ・ワダ・マルシアーノ教授「侯孝賢の「記憶」との対話」は『珈琲時光』が東京の電車路線図に沿って映画を設計している点、またヒロインの意識を反映する音楽の利用に注目し、侯監督が如何にこの

“日本映画”を作り上げたかを解釈している。

台湾大学の盧非易副教授は、朱天文氏（作家。侯映画の脚本家、）の学生時代からの親友である。彼の「時の鳥瞰—侯孝賢映画の時間性」は、侯映画のドラマ・プロットの高低や起伏が「典型的語り」とは異なり、鳥瞰式の叙事をもたらししていると分析する。

二つの座談会記録には、侯孝賢監督と朱天文とのざくばらんなやり取りの中、二人三脚の映画製作のエピソード満載である。

侯孝賢については、ヴェネチア国際映画祭グランプリ受賞以降、日本でも映画雑誌や映画関連本で多く取り上げられてきたが、映画論を集めた書物は、実のところ本書が初めてである。映画／台湾研究者にとって価値あるものであることを願う。

なお、筆者が張小虹論文を訳する際、本研究科D3で台湾映画専門の鄧筠さんの助力を仰いだ。勝手ながらこの場を借りて謝意を表したい。

（あるむ出版、2012年）



河村雅隆著

『放送が作ったアメリカ』

寺島 工人

(国際多元文化専攻 メディアプロフェッショナル・コース 博士前期課程2年)

アメリカほどメディアに飢えた国はない。アメリカはその成り立ちから「砂塵に霞む遙か未開の地への憧れ」と「遠く海を隔てた故郷への郷愁」という、相矛盾する情念が形作ってきた国家である。「明白なる天命」を信じ、新天地での孤独に耐える入植者たちが欲したのは、何よりも情報であり、国民としての絆だった。本研究科の河村雅隆教授の著書『放送が作ったアメリカ』を読むと、放送はアメリカをアメリカたらしめるために生まれたのではないかという感慨すら覚える。メディアの王様としてのラジオ・テレビの絶頂期とアメリカの栄光の時代が20世紀の百年間でピタリと重なることは、単なる偶然ではなく、やはり必然なのだろう。来春から氏と同じく放送の世界に身を置くことを許された者として、先輩の著書を紹介させていた

だ。

河村氏は1975年にNHK入局後、報道畑で数多くの報道番組を手掛けてきた。また日本から海外への情報発信にも従事し、1991年から2年間ロンドンに、2007年から3年間ニューヨークに駐在した経験を持つ。豊富な海外体験で培った幅広い視野は執筆活動にも存分に活かされており、過去にはイギリスやフランスに関する著書も出版している。本書もタイトルこそアメリカと銘打っているが、第1章からルイジアナ割譲やマルコーニの渡米など、同時代のヨーロッパの動向に頻繁に言及しており、極めて興味深い。氏も序章で述べているとおりアメリカのメディアを扱った本は数多いが、その対象の巨大さゆえに他国との比較にまで踏み込んだものは意外と少ない。縦軸としてのアメリカ放送史と、横軸としての放送事情比較が絡み合った本書の見事な構成は、まさに氏が人生で得た海外経験の集大成と言えるだろう。だがこうした幅広い視野を有しながらも、その筆さばきは決して散漫にならない。むしろ世界を通してアメリカ独自の事情を映し出すことで、例えば多様な意見を放送内でバランス良く公正に伝えなければならないという「公正原則」や、地域のケーブル放送局にその地域内の全ての地上波放送をケーブルで再送信することを義務付ける「マスト・キャリー・ルール」など、アメリカ独特の規制が生じた背景が見えてくる。本書を読むと、アメリカの放送が現在の形に至るまでには幾つもの偶然があったことが分かるが、同時になぜそれがアメリカでは成立しえたのか、深く考えさせられる。

やや余談になるが、氏のように大西洋という広い枠組みを通してアメリカを照射する手法は、近年のアメリカ植民地史研究の分野でも主流となっている。そもそも18世紀後半に生まれた若い国家であるアメリカで、建国以前の歴史を単純にアメリカ史の一部として扱うことはできない。国民国家成立以前の歴史をその国史として捉えず、国家そのものの枠組みを相対化して研究する必要性は、多くの歴史家を悩ませてきた。しかし1960年代以降、ジャック・P・グリーンが提唱した「発展モデル」やJ・G・A・ポーコックが提唱した「新しいイギリス史」など、米英で現れた新たなスコープが、植民地時代史

を合衆国建国と切り離し、大西洋全体の空間的拡大の歴史へと注目することを促している。バーナード・ベイリンは、このパラダイムシフトをアトランティックヒストリー（大西洋史）と呼んだ。河村氏はこの大西洋史を言わばメディア史に応用した格好だが、この手法は極めて有効であろう。空間的制約を容易に超える通信・放送というヨーロッパ発のメディアを、新興国アメリカにおいて論じる場合も、やはり大西洋史という枠組みは欠かすことができないと感じた。

話を戻すが、アメリカの放送は日本とはまるで事情が異なる。日本では公共放送と民間放送の二元体制が戦後早くに成立し、NHKのあり方に象徴されるようにイギリス流の「放送＝公共的な事業」という概念が良くも悪くも深く根付いている。だがアメリカでは20世紀初頭から「放送＝プライベートな産業」として発展してきており、4大ネットワークと呼ばれる民間放送網が強い影響力を誇ってきた。しかしその一方で、「利益と視聴率最優先」の放送を見直す動きがあたりかも休火山のように絶えず噴き上がってきたことも事実である。1970年にはそうした声が全米初の公共放送PBSを成立させた。この放送の産業性と公共性を巡る議論はアメリカ放送史の軸をなすものであり、河村氏はこれを「自由と規制の振り子」と呼ぶ。第2章で言及されるFARA（外国団体・企業に対し、アメリカ国内でのプロパガンダ活動を規制する法律）などの独自のルール、公共放送観の日米の違い、CATVや衛星放送を巡る特殊事情などの記述には、氏が北米での仕事で得た知見が存分に活かされており、「自由と規制の振り子」を理解する上で貴重な事例が詰まっている。

授業などで氏は常々、「現在の問題は今のことだけを見ていても分からない」と語っている。「自由と規制の振り子」もそうした考えに基づく概念であり、今を成り立たせる過去を通してアメリカの放送の「今」を理解する重要なパラダイムである。そしてまた、河村氏の関心は歴史を踏まえ、未来へも広がっている。いや、「これから」を考えるために歴史を押さえていると言うべきなのだろう。

メディアプロフェッショナルコースでは、佐藤幹夫NHK名古屋放送局長を招聘し、2012年7月に『テレビは21世紀に生き残れるか』と題する講演会を開催した。この論題は今、河村氏が最も関心を寄せているテーマであり、本書の第3章でも一節が設けられている。アメリカでは2010年のバンクーバー五輪時に、インターネット上での競技への関心の高まりが、テレビの録画放送の視聴率を押し上げた。ネットとテレビは、必ずしも敵対するばかりではないのかもしれない。

ティム・オライリーの言うWeb2.0の時代が到来し、誰もが放送局となれる時代。そのとき、テレビはどこへ向かうのか。氏の薫陶を受けた者として、そしてこれからの放送業界に身を置く者として、今後とも日米のテレビの動向を注意深く見守っていきたい。

(ブロンズ新社、2011年)



ノーマン・フェアクラフ著（エドワード・ヘイグ、他訳） 『ディスコースを分析する—社会研究のためのテキスト分析』

ヘイグ エドワード

（国際多元文化専攻 メディアプロフェッショナル論講座教授）

本書は、社会的文脈に関わる言語を具体的に分析するために、実践的なガイドを提供してくれる。特に、グローバリゼーション及び新資本主義のコンテキストにおいて、社会的実践に見られる言語を含む記号現象とその他要因の間の弁証的關係に焦点を当て分析している。2003年の初版以来、人文学及び社会科学の研究者から非常に高い評価を受けており、今後日本においても翻訳版が幅広く活用されると期待される。もともと英語で出版され、内容も英語のテキストのみが分析対象にされているが、分析方法など全体の考察は日本語や他の言語に応用できるものである。

本書は2種類の読者層に向けられている。まず、言語資料（文書または会見記録など）を研究資料としている社会科学や人文学の専門家であり、特に、言語学の背景知識を学習したい読者にとってついでである。もう一方の対象読者は、言語と社会の関係をテーマに分析を行っている学生及び研究者で、社会理論の知識を習得したいという読者層である。

本書は実際の社会問題に関わる研究の向上のために言語の分析が応用され得る点を強調し、話し言葉と書き言葉を分析するフレームワークを提示しており、第一の読者層に役立つ。また社会理論の導入部分において、社会理論が言語現象へどのように応用され得るかが紹介されているため、第二の読者層に役立つであろう。

本書は批判的ディスコース分析（critical discourse analysis：略称CDA）で知られる学術研究分野に属し、著者ノーマン・フェアクラフはそのCDAの創始者であり第一人者として知られている。またCDAは批判的社会研究の一種であり、その目的は貧困問題、差別、不平等など社会に蔓延る問題を周知し、これら問題を改善すべく社会の変化の可能性を見出し、人間の条件の向上につながることに貢献することである。殊に、近年、批判的社会研究の主たる焦点は、政治、教育そして文化などを含む社会生活全面における現代資本主義の変化に当てられ、グローバリゼーション、「知識経済」、「情報社会」の出現などをテーマに研究が行われている。

上記2つの用語が示唆する通り、言語（または記号現象）は変化の主要素とみなされる。実際、CDAの学者は言語の重要性の拡大は「新資本主義」に見られる特徴であると主張しており、それゆえ、新資本主義と、それがもたらした社会経済的变化を理解するために、我々は言語の役割を探求しなければならない。

フェアクラフの手法で最も重要な特色の一つとしては、大きく異なる二つの観点からみたディスコースを関連付けることである。その一つは、ミシェル・フーコーの理論に基づく社会科学的観点から見たディスコースである。「ディスコースの秩序」と呼ばれる抽象的なレベルに焦点を置く。このレベルのディスコースは「権力に仕える意味作用」（Thompson, J. Studies in the theory of ideology. Cambridge: Polity Press, 1984）として描写されるイデオロギー概念と深く関わっている。

こうしたマクロのレベルに対し、ミクロのレベルでは言語学的ディスコースを対象とする。ここでは特に談話分析の観点から分析が行われ、会話や文書で実際

に使用される言語をデータとして詳細に分析される。フェアクラフはとくにマイケル・ハリデーの言語学理論、またその理論に基づく分析方法である選択体系機能言語学の立場からテキスト分析の手法を用いる。フェアクラフと彼に続くCDAの研究者は言語と社会の関連性を理解するにはディスコースをマクロとミクロの両レベルから考察する必要があると考えるのである。

本書は、四つの部分から成っている。第一部は著書の理論の骨組みの導入である。ここではテキストを社会的実践及び社会構造といった抽象的な次元に位置する具体的な出来事の一要素として捉えている。また、間テクスト性に関しても紹介されている。第二部はジャンルについてであり、テキストを社会的行為として捉えている。第三部はディスコース群ならびに表象としてのテキストについて紹介している。第四部はテキストと社会的アイデンティティの構築との関係を考察している。ここではテキストに見られるモダリティと評価の活用について大変有効な議論が紹介されている。結論の部では、著者が世界経済フォーラムのウェブページからグローバリゼーションに関する資料を例にとり、それまでに説明された分析手法を実際に応用して、その具体的な分析例を提示している。また、社会的正義の拡大に向けて社会変化に貢献すべく、CDAの果たすべき役割について「宣言」も明示されている。

本書の優れた点は、上述のテキスト例に加え、「新資本主義」に関わる14の文例が挙げられていることである。例えば英国ブレア元首相による演説や英国で行われた遺伝子組換え（GM）食品の農場実験についての会議文書の引用も挙げられている。これらのテキストは、フェアクラフの分析手法を説明する中で、具体例として本書全体を通して使用されている。本訳書はそれらの全テキストの英語原文を掲げるばかりではなく、その完全な日本語訳も提示している。

本書は、多様な専門領域の読者を想定して、社会科学や言語学の分野での概念や理論について、用語解説と理論家解説を巻末に付している。また、日本語版の読者に役立つよう、相田洋明による翻訳家解説と高木佐知子によるフェアクラフのCDA研究についての解説も付されている。さらに、索引には、全ての英語用語に対する日本語解説も添えられている。

CDAは1980年代後半に新しい学術分野として誕生した。1989年に出版されたフェアクラフの最初の著書Language and Powerは非常に大きな影響力をもち、CDAを学術分野として確固たるものとした。この著作以降、フェアクラフは数々の著書や論文を執筆し、彼の理論と手法を絶えず展開続けてきた。フェアクラフとその他のCDA研究者の実績のおかげで、CDAは急速に発展し、今日では学術の一部門として不動の位置を得た。ただ、数多くのCDA関連の主要書籍は、いまだ日本語には翻訳されていない。それゆえ、本書が日本におけるCDA研究の飛躍的な発展に大きな貢献をすることが期待されている。

（くろし出版 日本メディア英語学会メディア英語談話分析研究分科会訳 2012年）



恩田 満著

『日本古代文学作品選析』

恩田 満

(日本言語文化専攻 高度専門職業人コース博士前期課程 2006 年修了)

中国人の日本語学習者は年を追うごとに急速に増加している。これまでの中国における日本語教育は、聞く・話すという音声教育が中心を占め、それに加えて読む・書くという四分野の実学的な教育がその主流であった。しかし、日中相互の文化的な交流が盛んになるにつれて、ここ数年はこうした実学的な教育に加えて、日本の文化や文学を学習する教育にも重点が置かれるようになってきた。私は言語を学ぶことがその国を知る上で第一義的に重要であるとするが、文学を学ぶことはその内容をさらに深いものにすることができると考えている。こうしたことに鑑みて、日本語や日本文学を学ぼうとする中国人学習者を対象にして本書をまとめることにした。これまで中国において、近代・現代の日本語や日本文学に関するすぐれた著書が、中国人あるいは日本人の研究者や教師たちによって数多く刊行されてきた。だが、古典文学に関するものは、その類を見ることが少なかったと言わざるを得ない。

私は日言文の高度専門職業人コースを終えた後に、中国の安徽大学に特約教授として招かれ、日本文学や伝統文化などの講義を担当することになった。とりわけ、日中の文化交流の歴史や、日本の古典文学と中国文学との関係などを中心に講義を進めたのだが、残念ながら、日本の古典文学については、中国人にわかりやすい良書を見つけることができずに苦勞する日々が続いた。そこでやむを得ず自前でテキストを作成することにしたのだが、その過程で、中国の思想や文化の影響を受けた作品を中心に抄出することを思い立った。その理由は学生たちの興味と関心を引き出そうとしたからであった。

日本の古典文学は、歴史や社会などを叙事的に表す中国文学よりも、人々の情愛や哀感を表す叙情的な傾向を特徴としていた。歴史的に見ると、古代文学(奈良・平安時代)は、中国の影響を受けた儒教的な側面や仏教的な要素が色濃く漂うものであった。中世文学(鎌倉・室町時代)では、戦乱という時代背景もあって、仏教的な無常観が漂う作品が多くなった。近世文学(安土桃山・江戸時代)では、知的な要素が重んじられ、さまざまな文学形態が開花するようになった。しかし、いずれの時代にしても中国古典から日本の古典文学への影響は計り知れないほど大きく、歴史や思想においては、司馬遷の『史記』の膨大な通史をはじめ、『論語』や『孟子』などの儒教思想、さらには『老子』『莊子』などの道教思想などの影響が挙げられる。文学においては、唐代の杜甫・李白、あるいは白居易などの漢詩は、直

接間接を問わずさまざまな形で日本の古典文学の中に深く吸収されている。本書に取り上げる作品を選ぶに当たって、これらの中国思想や文学作品と日本の古典文学との間で関連が深いものをその基準においた。

本書は日本の古典文学を通史的に捉えて、奈良時代と平安時代の代表的な作品の一つずつゆっくりと読み解いていくことを通じて、日本の伝統的な文学や文化を理解してもらうことを目的に編纂した。なお、日本語の注釈や解説だけでは、中国人学習者にとって学習上の困難が大きいので、安徽大学の教え子の一人で、広東外語外資大学の大学院を修了した徐仙梅氏に、私が付した注釈・解説・現代語訳などの部分を中国語に翻訳することをお願いした。教え子が日本文学の理解者として研究者としてさらなる進歩を遂げることを期待したからである。

中国人学習者の多くが言語や文学を学ぶ際に、音読や朗読を繰り返すという特徴を持っているので、発音しやすいように本文のほとんどの漢字に現代の読み方をルビとして付した。さらに、旧仮名遣いで本文表記がされている部分についても同様な措置を施した。また、文法的な内容の理解を深めてもらうために、本文中の単語や熟語の解釈、助動詞や助詞の意味・用法についても可能な限りの詳しい説明を加えた。

なお、本書の構成は、以下の通りである。

- ①『古事記』②『万葉集』③『竹取物語』④『伊勢物語』
- ⑤『古今和歌集』⑥『土佐日記』⑦『大和物語』⑧『落窪物語』
- ⑨『蜻蛉日記』⑩『源氏物語』⑪『枕草子』⑫『更級日記』
- ⑬『今昔物語集』⑭『大鏡』⑮『堤中納言物語』

本書は二方面の意図を持っている。一つは、日中の古典文学の比較であり、もう一つは、中国人生徒向けの日本古典文学の紹介である。だが、編著者としては、本書でこれらの古典を学ぶことを通じて、敬語を含む現代語の正しい使い方や、現代日本人の心の内にある伝統的な思考法も学んでほしいという欲深い願いも持っている。

本書は、日中の文化交流の架け橋となるよう願いを込めた第一作であるが、引き続き第二作として「日本中世・近世文学選」を来年に刊行する運びになっている。さらにその後、近代・現代までを含めて通史的に日本文学の紹介をすることを予定している。

(北京師範大学出版集団・安徽大学出版社、2011 年)

スペイン語、ポルトガル語、そして英語で授業する

水戸 博之

(国際多元文化専攻 多元文化論講座教授)

昨年度から今年度前期までの担当科目「中南米言語表現論演習 a, b」と「日本文化概論」について報告をします。

「中南米言語表現論演習」は、aではスペイン語圏、bではポルトガル語圏を扱うと授業案内では記してありますが、これはあくまで便宜的なものであり、「演習」の目的を達成し、かつ成果を最大限引き出すため、受講生の要望や言語的背景により、対象とする内容および言語文化圏は柔軟に対応しています。

授業の言語は、できるだけスペイン語またはポルトガル語を使用することを基本方針としています。昨年度はブラジル人1名、今年度はコロンビア人1名の各言語の母語話者が受講しました。それゆえ、昨年度はポルトガル語で、今年度はスペイン語で授業を行っています。

授業は、毎週90分の授業時間、一人の受講者が輪番制で自分の関心テーマを各言語でプレゼンテーションしディスカッションを行うという形式をとっています。内容に関しては一切制約を設けてはいません。他の発表の予行演習でもよいし、すでに行ったプレゼンの素材の使用も可能です。ただし、というか、唯一課せられた要件は、一授業時間帯を通して、スペイン語またはポルトガル語でやり取りを続けるということです。

一見、担当教員と母語話者の受講生には安易な内容に見えるかも知れませんが、実際のところは、なかなか厳しいものがあります。なぜならば、特定のテーマをまとめた一定時間扱っているうちに、教員は日ごろの「勉強」が試され、母語話者は、普段意識しない母語そして出身国について改めて問い直す機会を見出すことになるからです。

一方で、私は各受講者に、この演習方法の当否を問う、すなわち一種のフィードバックの意味で次のことを尋ねます。「この演習以外に、スペイン語あるいはポルトガル語で議論する場を諸君は持っていますか。もし他に機会があるのなら、内容と形式を変えましょう。」

現時点では他の研究科には同様な科目は開講されていないようです。また、ある外国語学部出身の日本人学生によると、彼の出身校にも無かったとのこと。一種のパラドックスと言えるかもしれませんが、外国語の専攻科においては、意外なほど学内において母語話者との接触の機会を見出すことが難しいようです。他方、本学の様な、理工系を中心とした総合大学の場合は、いわゆるスペイン語学科やポルトガル語学科は存在しなくとも、毎年約20人程度の両言語圏出身の留学生が在籍しています。彼らの多くは自然科学系の分野を専攻していますが、出身国の言語と文化について高い誇りを持ち、多忙ではあるが、機会があれば自国の紹介をしたいという強い希望を潜在的に持っているようです。

いささか手前味噌の感がありますが、その際忘れてならないのは、対応する日本人学生が持つ対象国に関する知見の広さです。一方、留学生の役割も単なるインフォーマントに留まるものではありません。

「日本文化概論」は本来G30のために、昨年度後期から開講した科目です。英文名は"Outline of Japanese culture since the 16th century"です。私がかなり前にごく短期間ですが、文化財関係の仕事に携わった経験があることからお引き受けしました。準備段階で、すでに多くの英語で行われる日本関係の科目がある中、いかなるテーマにマスターレベルの講義を構成するかでかなり迷いましたが、英語による講義であるから、日本と西欧世界との接触という大きな枠組みを設けました。

すなわち、ポルトガル人とスペイン人たちが来日した16世紀後半のキリシタン時代から現代という約5世紀の時間的視野です。初回の授業は、受講生の出身国、英語がネイティブあるいは同等であるか、関心分野等を尋ねるアンケートの後、「文化」と"culture"は同義であるか否か、日本語は日本文化研究に不可欠であるか否か、という問いから講義を立ち上げました。

また、全学への「開放科目」として開講したところ、G30の他に、短期交換留学制度を通じて約10カ国の学生が集まり、分野も歴史や哲学といった文科系のみならず、建築専攻者の受講もありました。

最初の2あるいは3週を導入に当てた後、16世紀におけるイエズス会のキリスト教宣教や鉄砲伝来などから始めましたが、文化史が中心になることから、編年的な構成とはらず、実質的には、山伏や垂迹美術なども紹介しましたから、年代的制限もありませんでした。

全体的には、食文化をテーマとして多く扱ったでしょう。乳製品を使用しないカステラのレシピ、日本式カレーライスと洋食の成立、ラーメンの歴史と麺を「吸る」という食事作法など、私自身が調べていて興味深く、また学ぶことが多かった。中には、授業でレシピを聞いてから夕飯の献立を考えるたり、あぶないからやめてくれと注意したにもかかわらず、テンブラを「実習」してくる受講生なども見られました。

私の口頭によるコミュニケーション力が限定されたものであるため、受講者とのやりとりは、主に授業の終了時に提出してもらいゆるりアクション・ペーパーに対する回答という形をとりました。いわゆる「筆談」ということになるでしょうか。一方、私の英語力を補うという意味もありますが、文化史の講義ですから、視聴覚資料は欠かすことができません。私は、基礎語学の授業では、普段あまり使用しないのですが、パワーポイントに編集したネットの写真資料や、近年国内向けにも放送されるようになったNHKの国際放送の番組を参考資料としてほぼ毎回、使用させていただきました。著作権法の改正に関し、様々な議論が再度なされていますが、「日本文化の海外発信」における非営利的な研究教育目的の使用は認められてしかるべきものであると思います。

ゼミ生の発表テーマから



「ブラジル『六月祭』の料理」



「アルゼンチンの待遇表現」

万葉集の用字法からみえたもの

胡 潔

(日本語文化専攻 比較日文学講座准教授)

私の主たる研究テーマは、古代日本の婚姻形態、家族・親族の構造に関するものである。日ごろ感じていることの一つは、古代日本語の婚姻語彙の複雑さである。その原因の一つに、古代日本の固有の婚姻形態を表す和語系語彙と中国の文献に由来した漢語系語彙の二系統の混用が挙げられる。最近万葉集におけるこの二系統の対応関係について大学院の授業で取り上げたことがあり、ここに二三記して、近況報告とする。

例えば「相聞」という語。これは万葉集の一部立の名である。婚姻語彙とはいえないが、相聞の部に収められた歌は主として男女間で交わされた恋歌である。歌の贈答なら、当時の人々に愛読されていた『文選』に「贈答」という部があり、恋歌を総べるのによさそうである。しかし、『文選』の贈答は殆ど男性同士の間で交わされたもので、恋歌とは無縁である。一方で、「相聞」の語は一言でいうならば、相互連絡の意である。恋歌と無縁である点では「贈答」と同じだが、空間的に隔てられた者同士が日常的に連絡しあい、互いに状況や心情を伝えるという意味を持っている。万葉集の時代は、妻問婚が行われていた。別々に暮らすこの時代の男女にとって、歌は日常的な連絡手段で、いわば生活の具であった。相聞の歌の内容を見ると、求婚から結婚、そして結婚後の各段階に亘っており、そこに歌の往来と人間の往来の世界が広がっている。妻問婚では、男性の通いによって婚姻生活が維持されるので、男性の移動が不可欠である。万葉集の巻十一、十二の巻頭に「古今相聞往来の歌」とあり、この「相聞往来」の出典について「往来数相聞」(曹植「與吳季重書」)や「行矣愛徳、往来相聞」(陸士龍「與楊彦明書」)などの先例が指摘されたが、万葉集の編者は恐らく「相聞」と「往来」の二語を一体的に理解していたのであろう。そしてこの二語の持ち合わせている日常性、社交性さらに流動性に着目して用いたと思われる。

もう一つ「通」という語。中国語の「通」は結婚語彙ではない。しかし、「一定のところを往復する」という意味を持っている点で、男性が女性の家と自分の家の間を往復するという妻問婚の習俗を表すのにぴったりの表現である。「通」は「カヨフ」と訓読されたのはそのためであろう。要するに、中国の文献に表現モデルのない、日本固有の恋愛や婚姻慣行を表現しようとした時に用いられた用字法の一つは、もともと婚姻語彙ではない中国語の一部の意味を借りて、それに新しい意味を付与して利用するという方法である。

それに対し、元来中国語の婚姻語彙をそのまま借用する方法も用いられた。例えば、「内大臣藤原卿娉鏡王女」(93番歌詞書)、「内大臣娶采女安見兒」(95番歌詞書)、「久米禪師娉石川郎女」(96番歌詞書)、「(大伴郎女)初嫁一品穂積皇子」(529番歌左注)などがその類である。これらの詞書や左注にある「娉」、「娶」、「嫁」といった漢語は、万葉集の中で日本語に訓読されているため、従来その原義についてはあまり問題視されなかった。しかし、両者の対応関係や意味

のズレについて考えるのもあながち無駄ではなかろう。例えば「娉」という語。中国語では「娉(聘)」は、嫁取婚の婚儀一納采、問名、納吉、請期、納徴、親迎といった内容を指す。この一連の儀式の最後にくる「親迎」とは、男性が花嫁の家へ行って、彼女を自分の家に迎えることを言う。つまり、この婚儀によって女性が男性の家へ移動するのである。一方で、万葉集の「娉」の用法は婚儀を指すのではなく、男性の求婚の行為および結婚成就を語る文脈に用いられている。例えば「久米禪師娉石川郎女時歌」という詞書を持つ九十六番歌「み薦刈る信濃の真弓わが引かばうまひとさびていなと言はむかも」というのは求婚歌。「内大臣藤原卿、聘鏡王女時、鏡王女贈内大臣歌」という詞書を持つ九十三番歌「玉くしげ覆ふを安み開けて行かば君が名はあれどわが名し惜しも」というのは男女の逢瀬後の歌である。この二例から見ても分かるように、上代の求婚と結婚は密接に繋がっている二つの行為である。無論女性が男性のもとへ移動することは観察されない。換言すれば、万葉集に用いられた「娉」には、嫁取婚社会で必要とされる嫁取りの婚儀や女性の空間移動が捨象されたのである。「娉」のみならず、「嫁」も「娶」も同様な原理で用いられている。中国語において、「嫁」は「謂之嫁猶女出爲嫁」(爾雅疏)と解釈されているように、女性が男性の許への移動する意味である。それに対して、万葉集では、女性が主語となる文脈なら「嫁」、男性が主語となる文脈なら「娶」という使い分けが見られるが、女性の移動は見られない。

対照的な婚姻慣行を持つ両社会、古代日本と古代中国を両端に置き、その間を「往来」するコトバたちを眺めるのが楽しい。



大学専任教員になって

磯野 正典

(国際多元文化専攻 メディアプロフェッショナル・コース 博士後期課程 2005 年修了、
金城学院大学国際情報学部国際情報学科メディアスタディーコース教授)



於：金城学院大学 研究室のあるWEST 4 号館前
新学期初日にゼミ生と

国際言語文化研究科メディア専攻の一期生として入学したのは10年前のことである。後期課程は私一人、修士課程に数人の後輩がいた。当時は何もかにもが手探りで、今にして思えば失笑ものの出来事もあったが、これも楽しい思い出の一つである。

時は流れ、このメンバーから私が二人目の大学専任教員となった。もう一人も地元のテレビ局勤務を経ての入学・修了、そして就職と経歴は同じである。

メディア業界での実務経験を経てからアカデミックな世界で学ぶ意義は色々あるが、本学で研究生生活を送ったことが今日の糧となっていることは間違いない。

さて、今年四月から奉職した金城学院は、当地女子教育の殿堂として、百二十年以上の歴史を積み重ねて来た。「強く・優しく」をモットーに高等女子教育を担う大学も戦後直ぐに現在の地で開学している。

私は今年度改編された国際情報学部のメディアコースに新任教授として赴任した訳だが、多くの驚きや戸惑いはあるものの、大きな感動と重い責任を感じての毎日は新鮮で、人生の新学期を迎えたような気分である。

担当授業は専門の「マス・コミ論」「放送メディア論」「ジャーナリズム論」の座学をはじめ、新入生の入門ゼミから、論文指導のゼミまでである。授業では実務経験の講話はほぼほどに、それらをロジカルに解説し意義付けを明確にするように努めている。

卒論指導にあたるゼミでは十名の学生を指導している。学生達と密度の濃い時間を共有するだけに、なかなか手間もかかるし、毎日が試行錯誤の連続である。

しかし、新米教師を選んでくれた学生が、卒業時に磯野研究室を選んで良かったと、多角的な面から思ってくれるよう全力を尽くしているつもりだ。

こんな真摯な気持ちになれるのも、素直で明るく元気、何事も自分の力で切り開いて行こうという学生たちのお蔭である。

「強く・優しく」の伝統は、金城学院のブランド力の具現化された形として連綿と生き続け今も発展している。

しかも、本学の学生だけでなく、教職員も総べからく金城学院が大好きなのだ。その気持ちがキャンパスの中に充満している。

学生は大学名の入ったパーカーやポロシャツを着て通学しているし、金城グッズを身に付けて、アイテムとして愛用している。当地区でこんな大学は他に見たことはない。

広大で避暑地の丘の様な緑深いキャンパスに溢れる闊達な笑顔は、何物にも代えがたい青春の一コマである。

入学早々のゼミ生との記念写真がある。ここに添えた言葉は次の通りだ。

『若者に訪れた春こそ、青春。 再びの春だって、青春』

そうだ、今私の中で再び青春が始まっている。

大学の行事も華やかだ。先日のオープンキャンパスでは、テレビスタジオでの番組収録を公開した。見学に来た高校生にも番組に参加してもらおうという嗜好だ。過去多くの学生がここに参加して入学を決めたらしい。

私はカメラとスイッチャーの指導をした。私の原点である学生時代の放送

クラブや放送委員会に戻ったような気がして、ちょっとばかりのノスタルジーを味わった。

ゼミの制作実習では、デジタル・ストーリーテリングを行っている。先日、全学で開催されたフォト・コンテストで、ゼミの学生が一般部門で優勝した。まさかの栄誉に教員である私が年甲斐もなく、歓喜乱舞してしまった。

また、メディア企業の研究では、地元放送局の見学や、インターンシップにも一般企業を含め、メディア企業へ学生が参加させている。就職問題は今日の学生にとって最大の課題である。早くから意識をもって就職に臨むことは無駄ではない。その過程の中で自分の姿が見えて来ることも事実だ。

ゼミ活動最大のイベントは年に一回の「ゼミ視察ツアー」である。今年は九月に「災害とメディア」をテーマに東日本大震災の被災地である東北を訪問した。現地のメディアである仙台放送、石巻日日新聞・女川災害FM・仙台災害FMで視察とヒアリングを実施した。

特に石巻日日新聞は、「6枚の壁新聞」の発行で世界的な評価を得たこともあり、ジャーナリズムの原点を学ぶ上で大きな成果を上げることができた。

被災地の視察は学生にとって大きな衝撃をもたらした。この現実をどう受け止め、それを今後の研究活動に活かして行くかが課題として残っている。

来年は沖縄への視察を計画している。沖縄の放送局を視察するとともに、沖縄の抱える様々な問題を凝視し、本土に伝えられている。

報道と現地との情報ディバイドを考える。

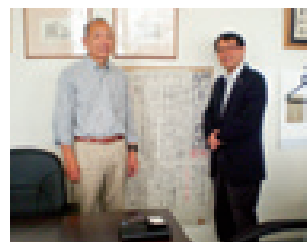
更に、地道な取り組みではあるが、文献研究やメディアの情報分析、新聞研究等の課題レポートは学生にとって負荷のかかる作業である。しかし、読み、考え、書くことで学生は成長していく。今の学生の読書力欠如は明確だが、これらの作業を通じて何とか一人前になっていくものなのだ。

要は、大学生生活の日常場面の中で、如何に気づき、如何に問題意識を喚起し、そして、それを如何に解決していくかといった繰り返しが成長につながるのだ。何もせずに、何も考えずに、何も失敗せずには、それこそ何も得られない。

「如何に多くの見聞と思考とトライアルを繰り返すか」これは私が教員として学生に与える明確かつ単純なミッションである。

若い感性は、このミッションを素直に受け入れ、それぞれのやり方で乗り越えていく。しかも、楽しみながらトライアルしていく闊達な姿は、傍から見ていても眩しく、そして、私にも希望と喜びを与えてくれる。

こんな若者たちに関われる職業は教師以外には、なかなかないだろうと感じた新米教師の1年目である。

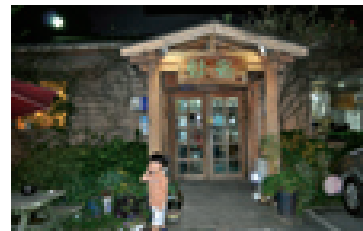


於：石巻日日新聞社
左：横井一彦氏(女川販売所長)
後ろに震災直後発行した壁新聞

のんびりと流れる時間の中で

飯田秀敏

(国際多元文化専攻 東アジア言語文化講座元教授)



絶品ソロンタンの店(天安にて)

研究科を退職してはや半年になります。学生として入学して半世紀近く名古屋大学に身を置いてきました。その間、お世話になりました数多くの方々に改めてお礼を申し上げます。

やっと卒業できたような気がして、これからのんびりと好きなことをやりながら余生を過ごそうと思っていたのですが、年末から胃の調子が悪かったので退職間際に検査をしたところ、胃潰瘍と診断され、精密検査やら治療やらで3か月余り病院通いをしました。原因はストレスだそうで、退職前の四、五年間の心労がたたったようです。治療の甲斐あって胃潰瘍の方はきれいに消えたのですが、ほんと一息ついたのもつかの間、今度は夏の暑さにやられてぐずぐずと過ごしています。

非常勤の口がいくつかあり、韓国語を教える仕事は続いています。名古屋の郊外ばかりなので仕事に行くというよりはお出かけという感じがして新鮮です。念願であった社会人教育もやっています。皆さん熱心でかえってこちらが励まされます。ただ、学生さん相手の授業はそろそろ潮時かなという感じもしています。

もともと機敏な方ではないのですが、病気と老化のためにますます動作が鈍くなりました。自分だけのために使える時間がゆっくりと流れて行くのを眺めて暮らしています。

時間が自由に使えるので、これまでほとんど見なかった韓国ドラマをよく見るようになりました。それで実感したのですが、日本のテレビ放送は韓国ドラマに占領されてしまったような感があります。これほどまでとは知りませんでした。ほとんどすべて連続ドラマで、80年代までよく作られていた単発ドラマはケーブルテレビでしか見られないようです。暇にまかせていろいろ見てみましたが、続けてみようという気になるのは数えるほどしかありません。たいてい1回か2回で予約登録を取り消します。とにかく荒唐無稽で付いて行けないのです。いかに視聴率を取るためだとは言え偶然の積み重ねで織りなされる複雑極まりない現実離れしたストーリーの展開は私の性に合いません。ただ、年配の脇役俳優の演技力には見るべきものが大いにあります。

私がこれまで韓国ドラマをほとんど見なかったのは、時間の余裕がなかったというだけではなく、私が「青ガエル」(韓国語でへそ曲がり、天邪鬼のこと)だったからでしょう。ブームと呼ばれることには昔から無意識的に背を向けてきました。大勢の人間が同時に同じ物事に対して熱中することにはいつもなんとなく拒否反応が起り、その隊列に加わることができませんでした。

私が韓国語に接してから韓国ブームと呼ばれることがいくつかあり、特に10年ほど前からの韓流ブームと最近のK-POPブームで日本の韓国語学習人口は飛躍的に伸びました。韓国語教育に携わ

る者にとって有難いことなのですが、私はあえてそれを無視してきました。学生諸君に興味を持ってもらいたいのは現実の隣国の姿であり、現実の韓国人こそが韓国の魅力の発信源であるのに、非現実、非日常のことばかりに多くの人々の興味が集中していることに例によって拒否感を強く感じたからです。これでは韓国を本当に理解できないのではないかと思ったのです。

先日、それが思いすごしではないことを確信する出来事がありました。友人たちと榮にある韓国料理店に行ってみたのですが、若者向けの店のようで、壁には韓流スターの写真がベタベタと貼ってあり、K-POPが店内にやかましく流れていました。よほど人気のある店らしく若い女性客で大盛況でした。ところが、料理を口に運んで、韓国料理とは名ばかりの味に啞然としました。もったいないという気持ちだけで友人たちと不満たらたら食事しながら、韓国の田舎でもてなされた家庭料理と地方都市で偶然入った食堂のソロンタンの絶妙ともいえる味を思い出していました。ブームというものの底の浅さを垣間見る思いでした。人の嗜好にけちをつけるつもりはありません。しかし、皆が皆同じことに興味を持っているのは、控えめに見ても胡散臭い、何か非常に大切なことに無関心であるのではないかと感じてしまいます。

最近、尖閣諸島(魚釣島)や竹島(独島)をめぐる雲行きが怪しいようです。領土問題について私は何も語る資格はありませんが、一介の韓国語教師として、このような問題から目をそらしている限り、韓国人と理解しあえるようにはならないとだけは言いたいと思います。一時的なブームで友好ムードが高まったように見えても、熱が冷めればそれまでということになりかねません。

こんなことを漫然と考えながら自分と世間をゆったりと眺めて暮らしています。



心づくしの家庭料理(羅州にて)

2012 年度オープンキャンパス・ポスター発表

飯 田 香 織	「中国人日本語学習者の音象徴語の理解」
入 江 友 理	「Can-do statements の記述に含まれる要素が自己評価に及ぼす影響―「聞く」技能に焦点を当てて」
勝 田 順 子	「マレーシア語の談話小辞kanの機能分化：日本語の文末形式との対比を通じて」
金 奈 淑	「量の多さを表す副詞的成分の意味分析―「たくさん」と「たっぷり」」
高 橋 暦	「言語接触の観点からみた非有生名詞主語の「見る」構文―文語体コーパスを利用して」
張 婧 禕	「中国人日本語学習者による流行語の理解」
初 相 娟	「中国人日本語学習者による動詞複合体の習得における構造の複雑性、難易度及び学習期間の影響」
マリア・ブラーエヴァ	「ロシア人日本語学習者の依頼に対する「断り」のストラテジー選択に影響する諸要因」
梁 青	「『新撰万葉集』における閨怨詩―和漢比較の視点から」
木 村 正 子	「エリザベス・ギヤスケルの作品に見る母と娘の関係―沈黙の声と天使の仮面」
黒 川 由 希	「王頼『淞隱漫録』に見る女性像」
近 藤 尚	「“メディア・リテラシー”は大学でどう教えられているか」
趙 静	「莫言と大江健三郎の文学における救済」
陳 玲	「谷崎潤一郎文学に見られる中国人の身体―「支那趣味」作品群を読む」
中 井 孝 子	「ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）（1850 - 1904）のシンシナティ時代（1874 - 1877）の新聞記事研究」
浜 島 清 美	「マルチチュードが開く主体の新たなかたち」
イザベル・ビロドー	"Invisibility of Literary Translators in France and Japan"
朴 香 花	「中朝新聞報道をめぐるニュースフレーム比較分析」
柳 沢 秀 郎	「アーネスト・ヘミングウェイにおける太平洋横断的考察」
梶 浦 眞由美	「速聴トレーニングによるリスニングの全体的処理能力と分析的処理能力の促進」

中国人日本語学習者の音象徴語の理解

飯田香織（名古屋大学大学院生 博士後期課程）

1. 研究目的・背景：音象徴語は日本語学習者がその意味を感覚的に理解できるので、ある程度自然に学習できるとの指摘がある。しかし、音象徴語は主に副詞として機能する語彙であり自然に習得できるものではないと思われる。そこで、中国で日本語を専攻している中国人を対象に、2音節反復型の音象徴語の理解度を調査することにした。その際、日本語の読解テストを同時に行い、読解能力テストと音象徴語の関係を検討した。

2. 先行研究

- 王(2011)の実験調査では、日本語母語話者が音象徴語の有声音と無声音の「重さ」に対する評価が類似していることから、日本語学習者も日本語母語話者と同じように音象徴語を自然に習得できる側面があると指摘している。
- 針生・趙(2007)は、中国人学生2年生(40名)と4年生(32名)の間に、有声音と無声音対比の音象徴語と大小を表わす対象に対応付ける課題を課した。しかし、日本語の学習年数が長くなっても、音象徴語の知識には違いがみられなかった(針生・趙 2007)。

6. 調査結果

- ① 単義語と多義語の音象徴語の項目の正答率の違いは見られなかった($F(1, 28)=2.308, p<.140$)
- ② 読解能力の違いが日本語の音象徴語理解に及ぼす効果を検討した結果、音象徴語の正解得点と日本語の読解能力でわけた3群(上位群、中位群、下位群)の間に有意差が見られた。 $[F(2, 84)=358.146, p<.001]$

3. 研究内容

- ① 本研究では、玉岡・宮岡・金・林(2011)で使用された二音節反復型で副詞として機能する音象徴語30語を刺激語として選んだ。

(例)

1	A	☐	予約する
	B	☐	踊る
	C	☐	笑う
	D	☐	止める

クラスタ別の音象徴語の平均正答率の比較は次のとおりである

表2 クラスタ別の音象徴語の平均正答率の比較

	クラスタⅠ (N=8語)	クラスタⅡ (N=7語)	クラスタⅢ (N=5語)	クラスタⅣ (N=10語)	シェフェの多重比較
読解能力					
下位群	44.69%	73.21%	13.33%	22.55%	Ⅱ>Ⅳ<Ⅰ<Ⅲ
中位群	75.02%	83.48%	29.38%	52.14%	Ⅱ<Ⅳ<Ⅰ=Ⅲ
上位群	83.90%	91.71%	45.81%	70.32%	Ⅱ<Ⅳ<Ⅰ=Ⅲ

注：Nは音象徴語の項目数を示す。

読解能力別の各クラスタの平均正答率の比較

表3 読解能力別の各クラスタの平均正答率の比較と多重比較の結果

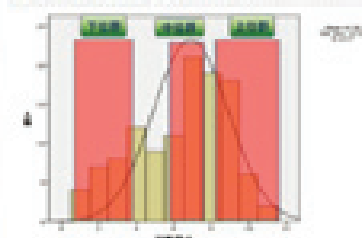
	下位群 (N=24)	中位群 (N=32)	上位群 (N=31)	シェフェの多重比較
クラスタ				
クラスタⅠ(N=8語)	3.33	5.06	5.84	下位群<中位群<上位群
クラスタⅡ(N=7語)	5.13	5.66	6.42	下位群=中位群<上位群
クラスタⅢ(N=5語)	0.67	1.44	2.29	下位群<中位群<上位群
クラスタⅣ(N=10語)	1.33	3.44	5.00	下位群<中位群<上位群

7. 結論

- 本研究では、読解能力が高い程、音象徴語の意味の理解も高くなることが確かめられた
- また、類似の中国語の音象徴語があったとしても、日本語学習者が各音象徴語の意味や用法を正しく理解するのは困難な場合があることを明らかにした。
- さらに、日本語学習者が経験的・直感的に音象徴語を学ぶことによって、音象徴語の意味を誤って理解してしまうことも示唆された。

5. 長文の読解能力に基づいた群分け

結果：日本語読解能力別の群分け



参考文献

- 玉岡寛津雄・木山幸子・宮岡裕生(2011)「読解と小説のコーパスに基づくオノマトペと動詞の対応」『オノマトペ言語研究』139, pp.57-84.
- 玉岡寛津雄・宮岡裕生・金剛真・林悠樹(2011)「韓国語を母語とする日本語学習者の語彙知識がオノマトペの習得に与える影響」『言語教育研究』32, pp.34-41.

Can-do statementsの記述に含まれる要素が自己評価に及ぼす影響 —「聞く」技能に焦点を当てて—

国際言語文化研究科 日本語文化専攻 日本語教育方法論講座 博士後期課程2年

入江 友理

研究目的

- ◆ Can-do statementsの記述の違いにより学習者の回答の分布はどのように変化するのか
- ◆ どのような記述であれば学習者の能力をより反映できるCan-do statementsとなりうるのか

研究背景

- ◆ Can-do statementsとは…
『目標言語を用いて何ができるか』を具体的な言語行動場面として記述した文
(例: 自分の家族について詳しく説明することができる)
- ◆ 『ヨーロッパ言語共通参照枠組み (CEFR)』の構築
 - ・ 行動中心主義の尺度記述の広まり
 - ・ 例示的能力記述文 (illustrative descriptors) の利用
- ◆ 自己評価の広まり
 - ・ 自律的学習や学習者主体の考え方
 - ・ 学習者自身による自己評価
 - ・ 自己の能力の把握
 - ・ 学習目標や学習計画を立てるため



Can-do statementsによる自己評価の有用性

- ◆ 自己評価にばらつきをもたらす要因
 - ・ 個人差要因
各評価者一貫して現れる評価者間の個人差に関する要因
 - ・ タスク要因
個々の評価項目に書かれているタスクの違いに関する要因
 - ・ 質問項目要因
質問項目そのものの記述の仕方に関する要因



質問項目要因に関する研究が少ない

Can-do statementsは経験的に作られることが多いが、研究によっては同じタスクを異なる記述で表しており、比較ができないばかりか、異なる結果になった場合にその原因が記述の違いによるものであるかどうか、判断が難しい。

Can-do statementsの構造

例) 政治についてのラジオのニュースがわかりますか



ニュースがわかりますか ⇄ 政治についての ⇄ ラジオの

Can-do statements



基本の記述 ⇄ 要素1 ⇄ 要素2 ⇄ ... ⇄ 要素n

結論

- ◆ Can-do statementsに加える要素の種類により、聴解問題との相関が高くなるものと低くなるものが見られた
 - ・ 相関が高くなるもの…「字幕がなくても」→映画、ドラマなどのCan-do statementsでは入れる必要あり
 - ・ 相関が低くなるもの…「ゆっくりはっきり話してくれれば」「よくある簡単な日常会話」など
→Can-do statementsに加える際には注意が必要

調査方法

調査対象: 韓国の大学で日本語を学ぶ韓国人学習者185名
調査期間: 2010年5月～6月
調査手順:

Can-do statements調査

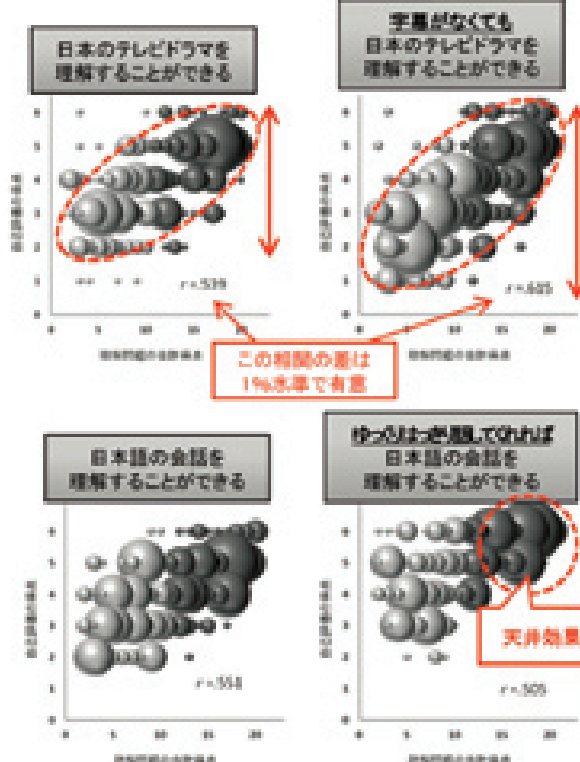


聴解問題

「聞く」技能に関するCan-do statements 110項目
(ターゲット項目が60項目、
ダミー項目が44項目)
所要時間は約30分

過去の旧日本語能力試験の聴解問題(1級～3級)から、識別力の高いものを選んだ20問
所要時間は約25分

分析結果



マレーシア語の談話小辞 *kan* の機能分化： 日本語の文末形式との対比を通じて

国際言語文化研究科 日本語文化専攻 博士後期課程2年 勝田 順子

＞研究の背景

・近年、東南アジア言語の談話構造や談話標識に関する機能主義的、相互行為分析的な観点からの研究が増加している。

・インドネシア語(談話小辞の研究—Wouk(1998)
・マレーシア語の談話構造や談話標識—
Goddard(1994)
⇒Goddard以外には、マレーシア語の談話構造や
談話標識の研究は体系的に行われてきていない。

＞研究課題

・マレーシア語のインフォーマルな会話場面のみ
出現し、発話者の相互公的な態度を表す *kan* の談
話機能及び機能分化の様相を、日本語の文末形
式との対比を通じて明らかにする。

＞データと分析方法

・マレーシア語の基本的特徴
・オーストロネシア語族
・膠着型言語
・基本語序はSVO

平叙文の例：

(1) Saya selalu pergi ke-sekolah dengan-kawan-saya.
私 いつも 行く ～へ 学校 ～と 友達 私
「私はいつも友達と学校へ行きます。」

疑問文の例

(2) Awak selalu pergi ke-sekolah dengan-kawan-
あなた いつも 行く ～へ 学校 ～と 友達
awak kah?
あなた ～か 「あなたはいつも友達と学校へ行きますか。」

・分析方法

◆会話分析の手法を採用し、マレーシア語母語話
者の二者対面会話(女子大学生の友人同士)
◆日本在住マレーシア語母語話者へのインタ
ビュー調査

＞分析結果・考察

◆*kan*の起源

*bukan*という否定形式(「(名詞)ではない」の
意)が縮約し、文法化した機能語。

◆*kan*の文法化の経路

(I) *Bukan kah*? < (II) *～, bukan?* < (III) *～, kan?*
～ではないですか? ～じゃない? ～じゃない?
～よね? ～よね?

◆自然会話を分析した結果、*kan*には2つの異なる
機能を有することが分かった。

・*kan*の第一の機能(機能I) — 否定辞を文末に
使って、確認する(付加疑問)

(3): Hari ini Hari Rabu, *kan*?
日 この日 水曜 *KAN*
「今日は水曜日だよな?」

◆*kan*の機能(I)への機能分化についての仮説

文頭の *bukan kah*? という命題内容の確認形式か
ら、疑問小辞の *kah* が脱落した。



bukan (～ではない) という否定形式が文末に生起
するようになった。
その際に、意味拡張が起こり、「付加疑問」の機能
を獲得した。



更に、「付加疑問」の機能を持つ *bukan* が形態的に
縮約され、*kan* になった。

それにより、汎用性が増し、日常会話では、「付加
疑問」の意味では *kan* が幅広く使用されるよう
になった。

◆部分的に並行的な機能と現象として、日本語におい
てはコピュラの否定形「～ではない」が形態的に縮約し、
「～じゃない?」という形になり、(4)のように付加疑問的な
機能を獲得。
(4) 北海道は寒いじゃない?

◆*kan*の第二の機能(機能II) — 文の語調をやわ
らげる機能

(5) Tapi *kan* dia cakap dia nak datang hari ini.
でも *KAN* 彼 言う 彼 (来東) 来る 日 この
「でもね、彼は今日来るって行ってたよ。」
⇒ この機能は、日本語の間投助詞「ね」の機能と並行的。
⇒ この間投助詞「ね」は、(6)のように、確認機能を持つ助
詞として、文末でも使用され、付加疑問と似た機能を持
つ。
(6) 彼は今日来るって言ってたね?

◆*kan*はどのように「語調緩和機能」(機能II)を獲得
したか?

*kan*は *bukan* から切り離され、文末で独立したイントネ
ーションユニットを構成する小辞になり、付加疑問機能(機能
I)を担う
⇒ 生起位置の融通性の発生
⇒ 文中の間投助詞的な機能(機能II)を後に獲得したと
推定

言語接触の観点からみた非有生名詞主語の「見る」構文 一文語体コーパスを利用して

高橋 暦 (日本言語文化研究科・応用言語学講座)
kym_tkhs@yahoo.co.jp



1. はじめに

・言語接触(Language contact): 語彙・文法の両面で、英語の構造に大きな影響を与える
(Thompson and Karlsson 1999, Helto and Kotova 2002)

・日本語における言語接触

・語彙の借用現象として観察される(漢語は漢語、近代以後は英語から(Lewis 1996))

・日本語における「動詞」の借用現象

・ドナー言語の動詞を「見」名詞として受け入れ、その後「する」を付す

(1) eat(英語動詞) → カム(名詞) → カムする(日本語動詞)

・ドナー言語の動詞の意味・用法をモデルとして、既存の日本語動詞に新用法を生み出す現象はあまり観察されない

(2) get a seat(「取り付く」成立させる) → 「取り付く」成立

→ ドナー言語の動詞用法をモデルとした言語接触: 「見る」

(3) 十一月の(東京貿易収支)が大幅に改善をみたことから、..

(中目新聞1998年1月19日)

(4) [受注数]は両社の〇・〇と、ともにニケタ合の増加をみた。

(中日新聞1993年11月18日)

(5) バブル崩壊後の(不良債権問題)が一応の解決を見て、..

(東京新聞2006年5月16日)

一特徴一

(I) 基本義(視覚行為)を参照させ、「出来事が出現する」といった意味を養う(動詞の意味の増減)。

(II) 目的語には変化性を含意する名詞が立つ(動詞の統制の問題)。

・漢語や英語動詞時: 「一致・合意・完結・進展(正見る)」

・複合名詞: 「(態度・傾向) ~を(正見る)」

・カタカナ語: 「ピーター・インフレ(正見る)」

(III) 非有生名詞が主語に立つ(構文の問題)。

(IV) 主に新聞、専門雑誌などの書き言葉に用いられる(言語使用域の問題)。

→ 語彙レベル、統制レベルでは解決できない → 構文レベルの考察が必要

→ この「見る」: 非有生名詞主語の動詞構文

日本語が「ナル」型言語であることを考えた場合、(III)は日本語の特性に反する

⇒ (I)~(IV)から、本研究では英語の「見る」の用法を「見る」構文と呼ぶ。

Research question:

「見る」構文は、日本語固有の表現か?

Hypothesis

非有生名詞主語の「見る」構文は、日本語固有の構文ではなく、英語の視覚動詞 see の用法に基づいて発生した欧文風である

(6) [The year 1861] saw an increase of 49 per cent. in the number of burglaries and 36 per cent. in cases of housebreaking. (The Times, Feb. 26, 1863)

(7) [The succeeding days] saw the Taffes resumed to peace and ease. (O. Henry, The Duplicité of Burgundy: 国訳(1967: 133))

(8) [The stadium] has seen some thrilling contests. (Langacker (2000: 389 (36a)))

『Oxford English Dictionary Online』の記述

To know by observation (local and other), to witness; to meet with in the course of one's experience; to have personal knowledge of; to be a contemporary of and present at the scene of (an event); to be living at (a certain period of time)

(http://www.oed.com/view/Entry/13439?t=0&sig=1&isAdvanced=false&isAdvanced=false) (「観察ある」はその他)の範囲によって知ること、目撃すること、自分の経験の過程に遭遇すること、(出来事に対する)個人的知識を有すること、あるいは出来事の現場に同時代的に居合わせること、(ある特定の時代)に生きていくこと(筆者訳)

先行研究 国訳(1967) Langacker (2000): 日本語動詞「見る」の連類は指摘されていない

seeの意味用法: (1)~(IV)のいずれかに該当する「見る」構文と共通する
このようなseeの意味用法を、「見る」構文に対応するものとして「see構文」と呼ぶ

2. 検証と分析

2.1 日本国語大辞典の記述

(二) 物事を観察したり、物事や人に対して姿をもって眺めかけたりする。

→ 観察行為・作用が観察する。

・ 文芸復興(1853)以降の文壇で各事象のあからずきと知らず知らずのうちに

し、観察によって意識の上で観察することによって

(『日本国語大辞典(第二版)(第12巻)』444頁) 下線は筆者による

・ 現代日本語における書き言葉の成立期の日本語: 「独立期現代語」

→ (I)~(IV)に新聞、専門雑誌などの書き言葉に用いられる19世紀

→ 書き言葉として語られたsee構文が漢語訳を主とし、書き言葉としての「見る」構文へと翻訳、受容された事象がその多く受け継がれた結果である

2.2 コーパスデータに基づく仮説検証

2.2.1 「見る」構文の出自: 日本国語大辞典(第二版)の記述の検証

(9) [我が国貿易]が此の如き長足の進歩を見るに至りしは、..

(『大蔵』1893年12号)

(10) [今年の上半季]は昨年の上半季に比して収入に於て實に三萬六千四百十七圓九十六圓乃至三割二分の増加を見る。

(『大蔵』1893年8号)

(11) 米國を始め葡萄牙、西班牙、露西亞の如きは減退したれども、他は概して増進せり、殊に[我が国]は最も著しい増加を見る。..

(『大蔵』1893年10号)

(12) 今や東京市街の喧嘩となる[電車問題]は何等かの解決を見んとして居る。

(『大蔵』1909年16号)

・ 「見る」構文: 独立期においてすでに成立している

・ 『日本国語大辞典(第二版)』: 記述修正

2.2.2 主語について: 場所性の有無: 現代英語see構文と独立期「見る」構文との類似

(13) [The early seventeenth century] saw the establishment of the present usage.

(G. L. Brook, (1958), A History of the English Language: 国訳(1967: 133))

(14) [今年の上半季]は昨年の上半季に比して収入に於て實に三萬六千四百十七圓九十六圓乃至三割二分の増加を見る。

(『大蔵』1893年10号)

(15) 七十年代以降、電子制御による[カラー印刷技術]が長足の進歩を見た。

(中日新聞1993年8月17日)

see構文:

空間的場所 あり(9)

時間的場所 あり(8-7)(13)

独立期「見る」構文:

空間的場所 あり(11)

時間的場所 あり(10)(14)

・ 独立期現代語の主語: 現代英語とは場所性が顕著しない

→ 目的語の表す現象の変化主体とも解釈できるような抽象名詞

(9)「我が国貿易」、(10)「我が国」、(11)「電車問題」

・ これらの特徴は、現代語「見る」構文に強く引き継がれている(3-5)

現代語「見る」構文:

空間的場所 なし

時間的場所 なし

目的語の表す現象の変化主体とも解釈できるような抽象名詞 あり

→ 主語: 現代日本語にはない現代英語の特徴が独立期現代語においては観察される

2.2.3 目的語について

2.2.3.1 動詞の統制: 独立期「見る」構文と現代語「見る」構文の相違

現代語「見る」構文: 「一致」「合意」「完結」「解決」「進展」など

独立期「見る」構文: この内「一致」「解決」のみ実例あり

「合意」「完結」「進展」は実例なし。(「一致」についても2例のみ)

現代語の共起語: 「変化性を含意する動名詞」

独立期現代語: ? (2.2.1.1へ)

2.2.3.2 作用や行為の結果物を表す目的語: 現代英語see構文と独立期「見る」構文の類似

(16) 當し[英國]が、當の大勢を固ることなく、極端に、労働者の團結を禁止するといふ法をたてたならば、何時の時代にか、恐るべき暴動を起したかも知れないのである。(『大蔵』1923年13号)

(17) 而して獨逸の意向甚だ妙ならず、後裔に三國同盟を見るに至れり。(『大蔵』1893年12号)

(18) ...the closer it became that the EC could not, the less eager [the United States] was to see the alliance... (Foreign Affairs, Jul/Aug, 1994)

現代英語および独立期現代語: 「変化性を含意する名詞全般」

(現代英語see: このような用法のほうが自然)

作用や行為の結果物を目的語に取る用法: 現代語「見る」構文には定着しなかった
現代英語see構文の中で一般的である用法が独立期「見る」構文においてのみ見られ、現代語「見る」構文に観察されないことは、本研究の仮説を支持する有力な証拠となる

3. 今後の課題

① 主語の扱い: 「が」と「は」の問題

② 「見る」構文の受動用法

(19) 昨年度は三半期と比較して三十三時間の就業時間に増加が見られた

(中日2006年5月15日)

③ 言語類型論的考察

(20) 19世紀の「見る」動詞が「見る」動詞が「見る」動詞

(21) 今度は3次元を見た。トルコ語

中国人日本語学習者による流行語の理解

張靖緯（名古屋大学大学院国際言語文化研究科）

1. はじめに

流行語は日本語教育の現場では扱われないことが多い。しかし、若い中国人日本語学習者は、同国でACG文化と呼ばれるアニメ（animation）、漫画（comics）、ゲーム（game）に高い関心を持ち、教室外でそれらを媒介として流行語に接触するようである（小矢野、2003；石井・小沼、1997；谷・桑本、2011）。

本研究では、流行語と基本的語彙知識の2つのテストを実施し、日本語を専攻する中国人大学生たちの間で

- （1）基本的な語彙知識が流行語の理解に影響するか、
- （2）どの品詞あるいはどの語種の語彙知識が流行語の理解に影響するか、
- （3）どのような種類の流行語がよく理解されているか、の3つの点について検討する。

2. 方法

- ・被験者：中国の大学で日本語を専攻する学生99名であった。また、統制群として、日本語を母語とする大学生38名に対して同じ流行語のテスト（選択肢は日本語に訳したもの）を行った。
- ・基本語彙知識のテスト：宮岡・玉岡・酒井（2011）の語彙テスト（全48問）を実施した。このテストは4語種あるいは、4品詞に分けられるように作成されている。
- ・流行語の選択とテストの形式：2007年から2011年までの新語・流行語大賞候補から「ゆとり世代」などよりよく日本社会や文化を反映していると思われる、簡単な語で組み合わせられた流行語を30語を選び、四者択一形式の流行語テストを作った。以下3つの分類がある。（1）ACGで、漫画やアニメに出典が求められる流行語、（2）人や世代の特徴を表した流行語、および（3）世相や政策を表した物事に関する社会現象・政策の流行語である。

3. 分析と結果

①中国人日本語学習者99名の基本語彙テストの平均上・中・下位の3群に分け、この群間での流行語の理解度を比較した。分層分析の結果、語彙の得点が高い群ほどよく流行語を理解していた [$F(2, 96) = 3.990, p < .05$]。豊かな上位群は流行語も良く理解していたことが分かった。

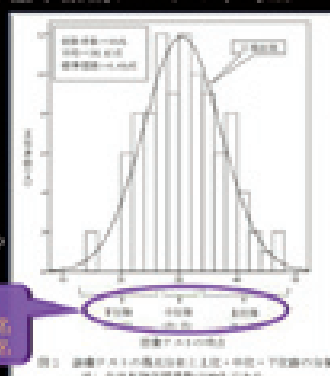


図2 基礎語彙テストの得点分布と上位・中位・下位群の人数

項目	項目名	項目コード	上位群 (n=33)				中位群 (n=35)				下位群 (n=31)			
			平均	標準偏差	範囲	最大値	平均	標準偏差	範囲	最大値	平均	標準偏差	範囲	最大値
動詞	動詞	1	12.52	2.15	10-15	15	12.52	2.15	10-15	15	12.52	2.15	10-15	15
	動詞	2	12.52	2.15	10-15	15	12.52	2.15	10-15	15	12.52	2.15	10-15	15
	動詞	3	12.52	2.15	10-15	15	12.52	2.15	10-15	15	12.52	2.15	10-15	15
	動詞	4	12.52	2.15	10-15	15	12.52	2.15	10-15	15	12.52	2.15	10-15	15
名詞	名詞	5	12.52	2.15	10-15	15	12.52	2.15	10-15	15	12.52	2.15	10-15	15
	名詞	6	12.52	2.15	10-15	15	12.52	2.15	10-15	15	12.52	2.15	10-15	15
	名詞	7	12.52	2.15	10-15	15	12.52	2.15	10-15	15	12.52	2.15	10-15	15
	名詞	8	12.52	2.15	10-15	15	12.52	2.15	10-15	15	12.52	2.15	10-15	15
形容詞	形容詞	9	12.52	2.15	10-15	15	12.52	2.15	10-15	15	12.52	2.15	10-15	15
	形容詞	10	12.52	2.15	10-15	15	12.52	2.15	10-15	15	12.52	2.15	10-15	15
	形容詞	11	12.52	2.15	10-15	15	12.52	2.15	10-15	15	12.52	2.15	10-15	15
	形容詞	12	12.52	2.15	10-15	15	12.52	2.15	10-15	15	12.52	2.15	10-15	15
副詞	副詞	13	12.52	2.15	10-15	15	12.52	2.15	10-15	15	12.52	2.15	10-15	15
	副詞	14	12.52	2.15	10-15	15	12.52	2.15	10-15	15	12.52	2.15	10-15	15
	副詞	15	12.52	2.15	10-15	15	12.52	2.15	10-15	15	12.52	2.15	10-15	15
	副詞	16	12.52	2.15	10-15	15	12.52	2.15	10-15	15	12.52	2.15	10-15	15

4. まとめ

基本的な語彙知識の豊かな学習者ほど流行語の理解度が高いことが示された。とりわけ、外来語と漢語の知識の豊かさが流行語の理解に強く影響していた。個々の流行語をみると、彼らは、ACG文化に関わる流行語はよく理解している反面、日本の社会・文化に関する背景知識が求められる流行語の理解は難しいようであった。若い中国人日本語学習者が、日本のACG文化に対して強い関心を持っていることが示された。

参考文献

- 小矢野、あきこ（2003）『流行語の語彙知識と理解度に関する調査』。『言語文化研究』、11、45-57頁。
 石井、あきこ・小沼、あきこ（1997）『流行語の語彙知識と理解度に関する調査』。『言語文化研究』、11、45-57頁。
 谷、あきこ・桑本、あきこ（2011）『流行語の語彙知識と理解度に関する調査』。『言語文化研究』、11、45-57頁。

中国人日本語学習者による動詞複合体の習得における構造的複雑性、難易度及び学習期間の影響

國際書院文化研究所 日本書院文化專攻 日本語教育學講座 初級編

1. 研究的目的

[illegible]

2. 問題の客観

5. **複動動詞** 動詞の動詞の予という動詞に準拠して、原動で複動動詞として用いられる場合は、必ず多少とも異なる意味を有する動詞（佐藤、1997）。「事故にやうておく、やうに「おく」とは動動動詞である。「おく」の動詞に「いる、ある、しやう、くる、いく、もたらぐ（いたたぐ）、くれる（くたまる）、やる（あげる、ましあげる）、みる、みせる」などがある。
6. **動詞連動** 日本語の動詞は、語幹に様々な動詞（動動動）や動詞がいて動動動と作用し、これを動動動動動動動動動と押さえている（佐藤、1999；高瀬、1992）



エリザベス・ギaskellの作品に見る母と娘の関係 ——沈黙の声と天使の仮面——

国際言語文化研究科 国際多元文化専攻 ヨーロッパ言語文化講座 D1 本村正子



エリザベス・ギaskellとは？

★研究の目的★

エリザベス・ギaskellは、社会の周縁におかれた人々に照らす。特に西洋のフィクションが伝統的に切り捨ててきた〈母〉の存在に注目し、〈母〉の視点から社会的弱者の救済策を講じる点で非常に画期的な作家である。

★研究におけるキーワード★

「沈黙の声」—これまでフィクションの表舞台で活躍できなかった〈母〉の存在をアピールする。沈黙していた〈母〉は、何をどのように語り始めるのか？

「天使の仮面」—ヴィクトリア朝小説の理想の女性像は〈家庭の天使〉である。〈天使＝死〉のイメージに従って、フィクションの中の〈母〉たちは身体的・精神的な〈死〉を受け入れてきた。しかしギaskell作品の〈母〉たちは、〈天使〉の振る舞いが女性に課された演技であり仮面にしか過ぎないことを暴露する。

- ロンドン生まれ。生後間もなく母と死別し、再婚した父とも別れて、マンチェスターに近いナッツフォードという田舎町で、叔母と祖母に育てられた。
- 21歳でユニテリアン派の牧師ウィリアム・ギaskellと結婚し、マンチェスターに居を構える。
- 一男五女をもうけるが、生後9か月で息子が病死したのを機に長編小説の執筆に取り組み、38歳で作家デビュー。
- 6作品の長編小説、30超の中・短編小説、そして同時代作家であるシャーロット・ブロンテの伝記を世に送り出した。

ギaskell作品の特徴

ヒロインの物語の定番とは…

失敗を経験して社会を知る → 精神的に成長する

〈幸福な結末〉= 恋愛成就と結婚 + 結婚後の沈黙

★ギaskellの主張

〈幸福な結末〉ありきの物語に楔を打つ。
女性の人生が結婚で終わるわけではない。
〈結婚＝幸福〉の図式がすべての女性に該当しない。

★ギaskell作品のヒロインたちはどんな女性？一例をあげると…
メアリ・バーキン(『メアリ・バーキン』): 労働者階級の娘で父は殺人犯。
ルース・ヒルトン(『ルース』): 未婚のシングル・マザー(置れた女)。
ミス・マティ(『クランフォード』): 未婚の老婦。
シルヴィア・ドブソン(『シルヴィアの恋人たち』): 海軍強制徴兵隊に婚約者を拉致された上、経済的理由から愛のない結婚をした。

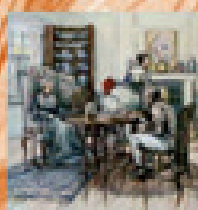
作家ギaskellの位置づけと評価

ヴィクトリア朝の「シェヘラザード」

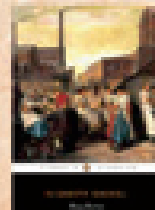
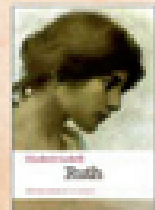
ギaskellと同時代の文壇の大物チャールズ・ディケンズは、書簡の中でギaskellのことを「我がシェヘラザード」と呼びかけた。シェヘラザードとはアラビアン・ナイトに登場するペルシア王の妃で、夜ごとに美女を娶ってはその命を奪う暴君に対し、次々と物語を紡ぎ出してその命を長らえた女性である。つまりギaskellの語りが読者を驚かさせないほどの魅力を持つという比喩である。同時に、女性作家は男性編集者から作家生命と引き換えのプレッシャーをかけられていたとも解釈できる。

ペンネームは「ミセス・ギaskell」

ヴィクトリア朝社会は男性優位であるため、女性は力も立場も弱い存在であった。そのため当時多くの女性作家が男性名の筆名で執筆していたが、ギaskellはあえて「ミセス・ギaskell」という女性名を使用した。同時期にはブロンテ姉妹やジョージ・エリオットなど、今日でも高い評価を得ている女性作家がいるが、いずれも男性の視点を駆使した作品によって成功した。ギaskellも決して無名の作家ではなかったが、彼女の死後100年間は無視され、1940年代になってようやく作品の見直しと再評価が行われるようになった。現在では文学だけでなく、文化研究や社会学の領域でもしばしば言及され、ギaskell作品は学際的な研究対象となっている。



『クランフォード』より



★社会が女性の人生のロール・モデルを限定し、そこから逸脱する女性に厳罰を与えるかのような措置に異を唱えるギaskellの目は、常に社会的弱者に対する憐れみや共感となって作品に投影されている。シェヘラザードが富麗を駆使して自身の命を長らえたように、ギaskellもまた富麗を武器として、厳しい社会を生き抜く術を伝えている。

王韜『淞隱漫錄』に見る女性像

名古屋大学大学院 国際言語文化研究科 博士後期課程 黒川由希



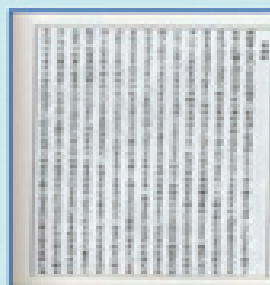
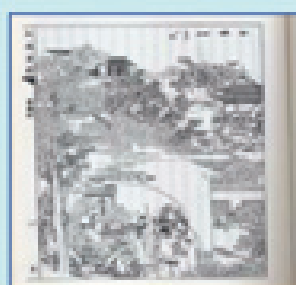
王韜(1828-1897)

1、王韜について

王韜、字仲復、一字子潜、号天南遁叟、また強國老民。蘇州城外長洲の南里村生まれ、初名は利賓。1848年上海に出て、The London Missionary Societyの宣教師W.H. Medhurstを知り、1849年から1862年まで14年余り彼の助手として働く。この期間には『聖經』(聖書)等の中国語訳に協力し、上海で最初の中国語刊行物『六合叢談』の編集にも参加した。しかし太平天国の乱の際、太平軍の地方長官に上書した建議で清朝政府から逮捕状が出されたため、1862年英国人の斡旋で香港へ亡命。香港ではThe London Missionary Society派遣のスコットランド人宣教師James Leggeの元に居住し、四書五経など中国經典の英文訳に協力。1867年11月、Leggeの招きで欧州旅行に出発、1868年夏から1870年1月までLeggeの故郷であるスコットランドのドーラーに滞在。香港へ戻ると1874年に中国語新聞『循環日報』を創刊し、実業自強を主張。1879年には日本を訪問。1894年、李鴻章の熟諾を得て上海へ戻り、執筆活動を続けた。

2、『淞隱漫錄』について

12巻120編。『聊齋志異』の形式を襲った文言短編小説集。1884年から1887年まで上海の中国語新聞『申報』の副刊『点石齋画報』に連載後、点石齋書局から単行本として発売された。各編の冒頭に、当時の有名画家呉友如の手になる挿絵一枚が付されている。



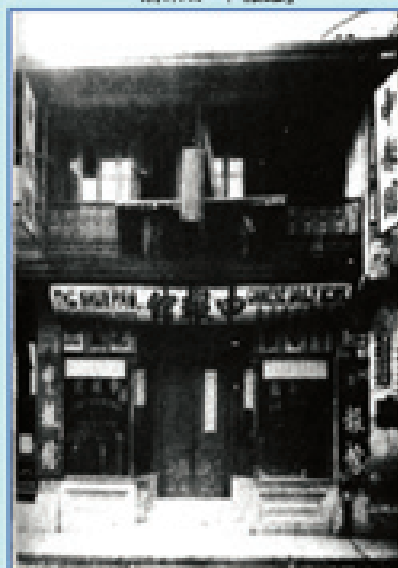
『点石齋画報』に掲載された『淞隱漫錄』

3、『点石齋画報』について

1884年5月8日創刊、1898年8月終刊。全528号。約15年間で4000点余りの図画を掲載した上海の旬刊画報。

創刊者は『申報』発行者、英国人アーネスト・メジャー(英査、Ernest Major)。清仏戦争、日清戦争などの戦況報道、医術や鉄道・飛行船といったヨーロッパの最先端の科学技術から、妓女のゴシップ、奇人・妖怪出現といったニュースまで、ありとあらゆる現象を呉友如、張志瀛、周權香、顧月洲、周慕雲、田子琳、金桂生、馬子明といった有名画家が時に想像を交えて描いた。

清末の『申報館』



4、『淞隱漫錄』の女性像とその意味

『淞隱漫錄』が創作されたのは、中国伝統社会に欧米の科学技術や近代制度がもたらされ始めた19世紀後半という時期である。また作者の王韜は当時の中国読書人の中では異例の、ヨーロッパ滞在という経歴を有していた。

『淞隱漫錄』に登場するヒロインの人物形象からは、王韜が明清文学の女性崇拜の伝統を受け継ぐとともに、外国で出会った活動的な女性たちの面影からも影響を受けたことが窺える。それはまた読者である上海の知識人たちの意識の質化を表すものでもあろう。

5、王韜主要文学作品・参考文献

王韜『淞隱漫錄』(清代點石齋原版重複石印)上海錦記書局、中華民國13年

王韜『滄庵詞話』中國近代小説史料續編29、廣文書局、1987年

王韜『淞濱瑣話』光緒癸巳淞隱樓排印本、天南遁叟手校 南里王氏藏本

『点石齋画報』初集(甲集)～總目(元集)全44集、廣東人民出版社、1983年8月

陈平原、夏晓虹编注『图像晚清：点石齋画報』百花文艺出版社、2001年8月

“メディア・リテラシー”は 大学でどう教えられているか

名古屋大学大学院 国際言語文化研究科 メディアプロフェッショナルコース 博士後期課程2年 近藤 尚

1. “メディア・リテラシー”ってなんだろう？

“メディア・リテラシー”は、21世紀に生きる私たちにとって、非常に重要な、不可欠の能力だと多くの人が指摘している。そこでこの研究は、メディア・リテラシーが実際の教育現場、とくに大学でどのように教えられているかを明らかにしていく。

まず、そもそも“メディア・リテラシー”(Media Literacy)ってなんだろう？

literacy = 1. 識字能力、読み書きの能力 2. 教養 3. 特定の分野・問題に関する知識・能力

ランダムハウス英和大辞典 第2版、(1990) 小学館

メディア・リテラシーは、「メディアの読み書き能力」、「メディアの読み解き能力」、「メディアの活用能力」など、さまざまな定義がなされている。これらの違いをよりはっきりさせるために、2人の研究者による位置づけを見てみよう。

2. “メディア・リテラシー”の2大研究者は こう位置づけている



鈴木みどり (1941-2006)

対象：主にマスメディア

目標：クリティカル(批判的)な読み手になること

鈴木みどり (1997) メディア・リテラシーを学ぶ人のために、世界思想社



水越伸 (1963-)

対象：マスメディアも含めさまざまな

目標：使用・受容・表現の能力向上

水越伸 (2002) 新版 デジタルメディア社会、岩波書店

水越の位置づけの特徴

- ・メディア・リテラシーが対象とするメディア … テレビ、新聞、ラジオなどのマスメディアだけではなく、電話、携帯電話、パソコン通信などのパーソナルメディア、さらに、カラオケやテレビゲームなども対象にしている。
- ・メディア・リテラシーの目標 … 情報の受容能力向上だけでなく、使用や表現の能力向上も含めている。

これだけ、インターネットや携帯電話が普及した現在では、水越の位置づけこそふさわしいといえる。

対象を「マスメディアだけ」でなく「マスメディア以外」も含めており、目標を「情報の受信能力の向上」だけでなく、「発信能力の向上」も含めるメディア・リテラシーを、「21世紀初頭型メディア・リテラシー」と呼ぼう。

3. では、大学で“メディア・リテラシー”は どう教えられているのか？

分析対象

- ・東海3県の66大学(国立大学6大学、公立大学6大学、私立大学54大学)から、「メディア・リテラシー」ということばを、タイトルもしくは内容に含むシラバスを収集。55大学のシラバスを得た。
- ・全体66大学の34.8%にあたる23大学に、「メディア・リテラシー」ということばを含むシラバスがあった。
- ・23大学のシラバス合計72枚を分析対象とした。

結果と考察

対象\目標	発信のみ	受信のみ	両方	計
マスメディアのみ	14枚(全数の19.4%)	4枚	6枚	24枚
マスメディア以外	4枚	3枚	3枚	10枚
両方	21枚(全数の29.2%)	6枚	8枚(全数の11.1%)	36枚
計	39枚(全数の53.0%)	13枚	22枚(全数の30.6%)	72枚

- ・「対象」…「マスメディアのみ」ではなく、マスメディア以外も含めた「両方」が多い。
- ・「目標」…情報の受信+発信の「両方の能力向上」より、「受信能力のみの向上」が多い。

- ・「情報の受信と発信」の両方を含んだ授業を、どうデザインしていくかが課題。
- ・とくに、「発信」をどう授業で扱うかが、「21世紀初頭型メディア・リテラシー」教育普及の、壁になっているのではないかと

4. 今後の課題：“情報を発信する教育”を どうデザインしていくか

「情報の発信」を大学の授業で扱うには、ビデオカメラや編集機などの機材の問題、1クラスの人数の問題などの制約がある。

しかし、100人前後の大教室でも、「情報の発信」の授業を行っているケースもある。例えば、グループに分かれ、お互いのインタビューをし、見出しや写真をつけて「友人の紹介記事を書く」という授業である。他にもさまざまな例がある。このような、「情報の発信」の授業について参加観察を行い、その手法と効果について分析していくことが今後の課題である。さらに、情報発信能力の向上が、個人にとって、社会にとってどのような意味があるのか、考察を深めたい。

莫言と大江健三郎の文学における救済

国際言語文化研究科 多元文化専攻 東アジア言語文化講座D1 趙静



莫言(1955年～)

中国の現代作家。山東省高密県出身。代表作『透明な青い人形』(『透明的な人形』)で注目される。『赤いコーラン』(『紅高粱』)、『白鶴の魂』(『白鶴の魂』)、『蛙鳴』(『蛙』)など多数の作品を世に送り出す。

両作家の交流

1994年、大江はノーベル文学賞の受賞式において「永続する異国と置かれた者かききそめたアジアという、古なじみの、しかしなお生きているメタファー群において、私は韓国、台湾や中国の郵政、莫言に結び付くことになりました」(大江健三郎『複雑な日本の私』(新潮文庫 1995年 14頁))と莫言のことを触れた。両作家は2000年9月27日に中国社科院外国文学研究所で行われた中日両国の作家、学者、評論家の座談会において初対面を果たした。なお、2002年、大江は莫言を個人訪問するため、彼の故郷である山東省高密県まで足を運んだ。両作家は長時間に及ぶ交流を行った。それ以来、大江は幾度も中国訪問し、両者は交流を重ね、お互いに関係を深めつつある。



莫言は大江の作品について、「最近、私は大江先生の作品を集中的に読んで、大江先生の歩んできた文学の道を感じ取りました。大江先生の作品に書かれている人間への愛と未来への憂慮と期待を深く感じました。このようなはっきりした声に、我々は特別な注意を払うべきです」(大江健三郎先生給我們的自序『莫言は誰か』(莫言 文化芸術出版社 2010年 23頁) 筆者訳)と彼を高く評価した。

「救済」という両作家の文学における共通点

莫言は故郷である高密県大黒郷を背景とした人物の悲しい運命を描いた悲劇的な作品を多数世に送ったが、最終作『蛙鳴』(『蛙』)によって作風を一変させた。「他人に罪あり、我また罪あり」という小説の序言から莫言が人間の救済を目指したことが窺える。一方、「救済」は大江の60年代以降の作品の主な主題であり、莫言が述べたように、大江の作品から「人間への愛と未来への憂慮と期待」が読み取れる。両者は作品における「救済」を比較することを通して、同じアジア作家としての両作家の共通点を探りたい。



大江健三郎(1935年～)

日本人作家。愛媛県出身。1994年、川崎康成に次ぐ二人目のノーベル文学賞の受賞者。『飼育』、『個人的な体験』、『万延元年のフットボール』、『深い静の皇子』、『水死』など多数の作品を世に送り出す。

救済への道に辿り着こうとする三つの視点

◆「ドン・キホーテ」の人物像

莫言と大江の作品はともにドン・キホーテに軸足を置いた人物像が存在する。救済の対象に自己投影から抜け出す。即ち、ドン・キホーテのように夢想に落ち、人間自身内部の状況への挑戦と冒険をさせることは両作家が抱く共通の思いである。彼らにとって、ドン・キホーテは消極的な存在どころか、生活の真の状況を追求しようとする象徴である。

◆「作品における人物の「冒険」

救済の対象を「ドン・キホーテ」にした後、救済に導かせる点においても、両作家の一致が見られる。作家生涯においても、莫言と大江ともに小説の書き方を敢断に設定した。作家自身も、作品における人物も、なぜこのような「冒険」が必要なのか、この問題に対し、大江の作品における莫言「皇子」を使って考察する。「皇子」は人間の魂であり、肉体と同時に存在するが、それは幼少時代に失われやすく、失って再び探すことは、両作家にとっての「冒険」によるしかないだろう。

◆「皇子」による再生

ここでの「再生」が魂の永遠に存在することによって人間が永遠に生きられるということを示す。即ち、「皇子」によって人間が再生できる。この点において、大江は『深い静の皇子』という作品の中で明確にしているが、莫言は「皇子」という言葉に直接触れていないが、作品『蛙鳴』において、「皇子」をはじめとする一連の人物が自己の世界で模索しつつあるものはまさにこの「皇子」であると考えられる。

上記にしたがって両作家の救済へ辿り着こうとする道を考察する。

谷崎潤一郎文学に見られる中国人の身体 ——「支那趣味」作品群を読む——

名古屋大学大学院 国際言語文化研究科 博士後期課程 陳玲



谷崎潤一郎（1886～1965）

1. 谷崎潤一郎と中国

谷崎潤一郎と中国の関係は深い。彼は少年時代から漢学の薫陶を受け、いち早く中国文化に出会っている。初期作品にすでに、「麒麟」を代表とする中国古典文学を題材にした小説が見受けられる。彼は、大正7年と大正15年、生涯二度の海外旅行をするが、いずれも中国であった。特に、最初の旅行の後、「支那趣味」と呼ばれる中国を舞台とするエキゾチシズム遊れる小説や随筆を多数発表していた。

2. 「支那趣味」作品群について

「臺灣の夜」：大正8年2月の『中外』に発表され（原題「南京奇望街」）、その後、『小さな王国』（天祐社、大8・6）に所収された。

「西湖の月」：大正8年6月の『改造』に発表され（原題「青磁色の女」）、同年9月に改稿があり、『近代情艶集』に所収された。その後、更に改稿されて昭和22年の『私』に収録された。

「天竺絨の夢」：大正8年11月27日から12月19日まで「大阪朝日新聞」に連載され、その後、作品集『天竺絨の夢』（天祐社、大正9年）に所収された。



アヘンを吸引している中国人男性

3. 見られる中国人の身体

半植民地であった中国は帝国の視線によって、対象化され身体化される。谷崎の作品においては、「前近代的」な中国の市街地、「不潔」な中国人男性、「異国趣味」に溢れる中国人女性が生体レオタイプに表象される。これらは、当時の日本において、中国は「近代化」とは対極に位置付けられ、性的商品として消費されていたことを象徴している。谷崎は中国旅行を通じて中国の現実には触れたが、元来彼の中国観が書籍を通じた想像の産物であった点を見逃してはならない。また、当時の日清・日露戦争の勝利により日本の国際的地位は向上していたが、それに基づく中国への優越感、谷崎の「支那趣味」作品群にどのように現れているであろうか。小説における「異国趣味」は、半植民地という他者に投与する帝国男性的なオリエンタリズムのまなざしに関連するものだということが分かる。そのため、「半植民地」女性の身体描写が、男性的な言説を再生産することとなり、「半植民地」女性に二重の暴力——「半植民地」支配の暴力と性差別的暴力を与えることとなるのである。

中国人は、アヘンを吸引し瘦せこけたイメージから「東亞病夫」と称されることを通じ、非常に不快な経験として、西洋に近代的な「身体」の発見を強いられた。一方「病的な身体」とは、清末から五四時期にかけて中国文学において伝統を非難する最も刺激的な隠喩であった。谷崎の作品の中で「結核」患者として描かれている半植民地少女の身体は、「美化」、「霊化」されており、これらのイメージ及び表象と一見すれば対照的と思われるが、実は表裏一体というように関わってくるのである。

4. 参考文献

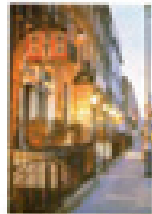
- 鈴木将久『上海モダニズム』（中国文庫、2012年）
- 西原大輔『谷崎潤一郎とオリエンタリズム』（中央公論新社、2003年）
- 野沢豊・田中正俊『講座中国現代史／第4巻』（東京大学出版会、1978年）
- 藤田光義など共著『中国20世紀』（東京大学出版会、1993年）



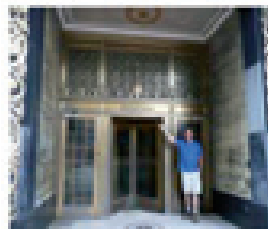
ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)(1850-1904)の シンシナティ時代(1874-1877)の新聞記事研究

名古屋大学 国際言語文化研究科 国際多元文化専攻
多元文化論講座 博士後期課程2年 中井孝子

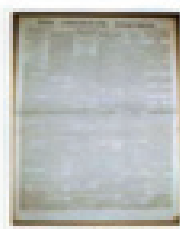
背景: ラフカディオ・ハーンの生涯は、ヨーロッパ時代(1850-1869)、アメリカ時代(1869-1890)、日本時代(1890-1904)に分けられる。主な作品としては、アメリカ時代に、マルティニークを題材として、『チータ』(1889)と『ユーマ』(1890)の2冊の小説、日本で11冊の本の出版が挙げられる。しかし、修行時代として、アメリカ・シンシナティ時代(1869-1877)での新聞記者時代があった。記事には署名がないが、シンシナティ・インクワイヤラー紙とシンシナティ・コマーシャル紙における記事が、最新のJon Hughesの研究で、439編、判明している。



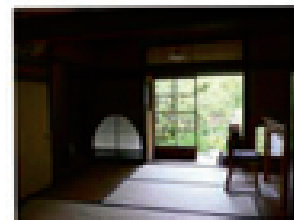
アイルランドで通じた車



ハーンがいた当時の最大の
シンシナティ・インクワイヤラー新聞社の社屋



当時のシンシナティ
インクワイヤラー紙



日本の松江で住んだ、今も残る旧家屋敷

目的: ハーンが何をどのように書いたのかを調べる。Jon Hughesの判定した439編のうち、日本では、50編しか入手できないため、シンシナティ大学への交換留学を通じて、記事入手し、精読する。

方法: 基礎研究として、現在までのハーンの記事を確定してきた、以下の7人(13冊)の調査を比較検討する。アルバート・モーデル、イオン・パーキンス、ウィリアムス・ターグ、西崎一郎O.W.フロスト、ウィリアム・ジョンソン、Jon Hughesである。日本では、ハーンの記事でないものが、それと認められたものもある。

何をどこまで明らかにするか: 当時の、他社の新聞記事と比較して、ハーンの記事対象と文章技巧を分析し、特徴を捉える。

現在の到達点: ハーンが書いた新聞記事の特徴は、描き方は、広範囲な状況説明から出発して、次第に事実を深めていく手法が採られている。また、この事実の深め方には演劇の登場人物と観客の情報の落差を使う方法が駆使されている。新聞記者は、情報量からすれば、圧倒的に読者(観客)に優っているわけで、その差を十分利用した書き方をしている。また、事件を取り巻く民衆の配置に、ギリシャ悲劇のコロスの役割が担わされている。

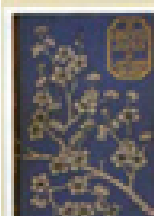
今後の課題: アメリカでの新聞記事の手法が、日本で書かれた作品にどのように受け継がれ、また、どのように変化したのかを検討する。



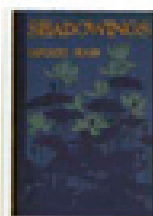
Chita (1889)



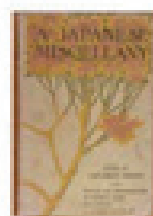
Yuma (1890)



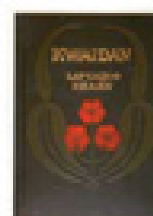
In Ghostly Japan (1891)



Shadowings (1900)



A Japanese Miscellany (1901)



Kwaidan (1904)



Japan (1904)

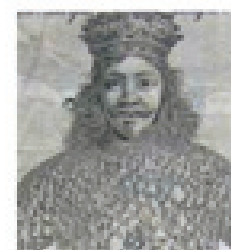
マルチチュードが開く主体の新たなかたち

国際言語文化研究科 国際多元文化専攻 浜島 清美

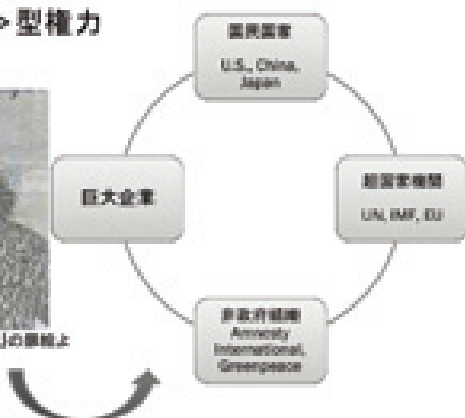
01: はじめに

本発表では、まずアントニオ・ネグリとマイケル・ハートが提示した＜帝国＞という主権形態とマルチチュードというスピノザに由来する主体概念の概要について解説し、さらにマルチチュードが＜帝国＞的圧力をはね除け別様な社会を創造する主体となりうる可能性について検討する。

02: ＜帝国＞型権力



1. ホッバス『リヴァイアサン』の題詞より

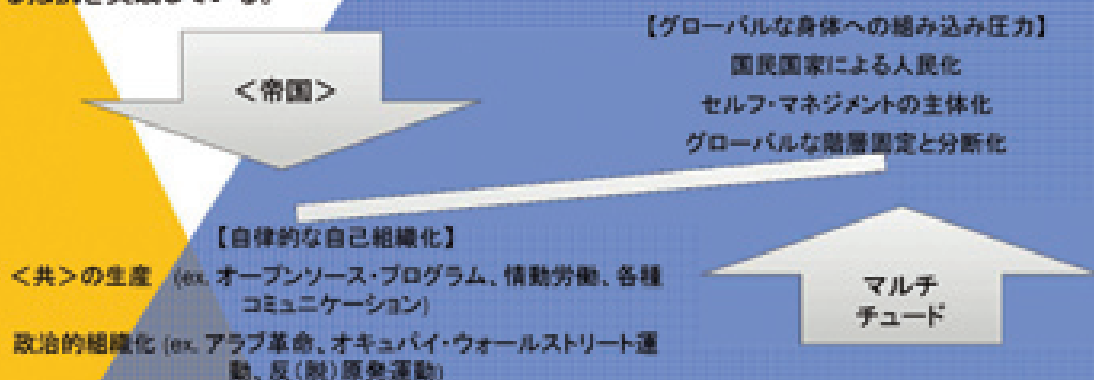


＜帝国＞型権力の特徴:

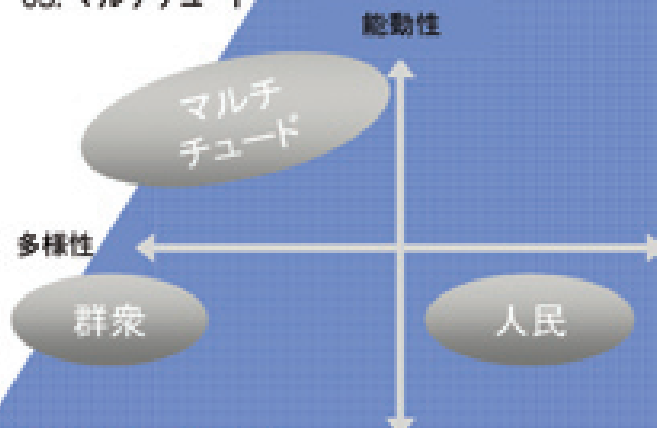
- 国民国家、超国家機関、巨大企業などがネットワーク上の主要な節点として権力を構成する中心なき主権形態
- グローバル資本主義市場のための自由主義的秩序の確立
- 労働と権力のグローバルな分割を規定する階層秩序の維持

04: ＜帝国＞の圧力 VS マルチチュードの潜勢力

＜帝国＞内においてマルチチュードは＜帝国＞権力の各種圧力にさらされているが、マルチチュードもまたそれらに対する抵抗を実践している。



03: マルチチュード



マルチチュードの特徴:

- ＜帝国＞に対して唯一対抗可能なインターネットのような分散ネットワーク勢力
- 複数の特性からなり同一性に還元されない社会主体(上図参照)
- 現代社会の(再)生産の中核をなす母体であり、多様な社会的生産の担い手すべてを含む
- 別様の社会を創造する潜勢力

05: おわりに

＜帝国＞はその存続にマルチチュードの力が欠かせないからこそマルチチュードを自らの身体へと取り込もうと腐心する。マルチチュードの自己組織化はまだ萌芽的かもしれないが、着実に進展していることを近年の世界情勢は示している。マルチチュードがマルチチュードを呼ぶこうした現象は、マルチチュードが社会的生産に関わるすべての者を含む包括的かつ開放的な主体であるからこそ起こる。マルチチュードこそグローバルな資本主義体制を内側から転換し民主的なグローバル化を実現する可能性に満ちた主体のあり方であろう。

主要参考文献:

Michael Hardt & Antonio Negri, *Empire*, Harvard University Press, 2001. (『＜帝国＞』2003年); *Multitude: War and Democracy in the Age of Empire*, Penguin, 2005. (『マルチチュード』(上、下)2005年)

INVISIBILITY OF LITERARY TRANSLATORS IN FRANCE AND JAPAN

文芸翻訳者の不可視性 ～フランスと日本の相違～

Isabelle Bilodeau, Multicultural Studies, Graduate School of Languages and Cultures

1. RESEARCH QUESTION 問題設定

How do the socio-economic aspects of “translator invisibility” differ French and Japanese publishing cultures?

2. “TRANSLATOR INVISIBILITY” 「翻訳者の不可視性」とは？

Translator invisibility (Venuti 1995) is a socio-economic and cultural position where translators get little recognition for their work, maintaining the illusion that the original author is the sole creative contributor. The self-effacement of ‘faithful’ translators is a basic assumption in Euro-American cultures such as France.

3. INVISIBLE LITERARY TRANSLATORS IN FRANCE

フランスにおける文芸翻訳者の不可視性

In France, book translations are mostly outsourced as **works-for-hire**. If royalties occur, they represent 2% of cover price on average.

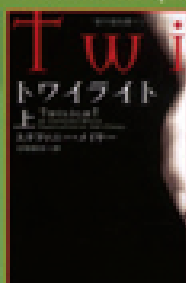
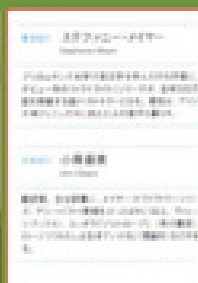
The translator’s name is usually **not on the cover** of books, but rather on the title page or on the back cover. Such practices make it difficult for translators to ‘make a name for themselves’.

French translators’ acceptance of their invisibility has **negative consequences**: cultural and social isolation, and exploitation by publishers (Kalinowski 2002).

French cover – no translator name



Japanese cover and biography page – translator credits parallel author credits



4. VISIBLE LITERARY TRANSLATORS IN JAPAN

日本における文芸翻訳者の可視性

In contrast, Japanese translators can aspire to individual recognition.

a. *Yakusho atogaki*—translator afterwords—are found in all types of translations in Japan, from romance novels to classics.

→ Translators to address readers directly, and have a role in marketing the book.

b. Printing of translator names on book covers also contrasts with French publishing practices.

→ Visible ‘naming’ makes the public aware of translators’ creative contribution.

c. Japanese literary translators are paid mainly in royalties at rates of 6–8%.

→ Translators have an economic interest in the success of their translation.

d. Japanese publishers rely on translators to locate and recommend new works.

→ Translators are valued for market savvy as well as translating skill.

e. Many past and present Japanese translators have become household names.

→ Readers are receptive to translators’ individuality.

5. COULD TRANSLATOR VISIBILITY WORK IN FRANCE AND ELSEWHERE?

日本にみる翻訳者の可視性はフランスや他国でも実行可能？

Japanese translators’ visibility is based on concrete practices that recognize individuality. Translators can select works and use their writing skills knowing that high material and symbolic returns are possible. Thus, the Japanese translator model points to concrete goals for translators seeking to counter the accepted position of invisibility in publishing cultures such as France’s.

Adapted from: Bilodeau, Isabelle. 2010. 「日本とフランスの文芸翻訳者—相違する不可視性」. *Literary Translators in Japan and France: Different Invisibilities*. 『文芸研究センター報告』 no. 104, 180–184.

References

- Kalinowski, Isabelle. 2002. ‘La vocation au travail de traduction,’ *Actes de la recherche en sciences sociales*. Paris: Seuil. 144: 47–54.
Miyada Noboru. 2008. *Huayala shuppan no jitsuan* [Translation publishing practice]. Fourth edition. Tokyo: Nihon Eitō Shikō Shuppanbu.
Venuti, Lawrence. 1995/2008. *The Translator’s Invisibility. A History of Translation*. Second edition. London and New York: Routledge.
Association des traducteurs littéraires de France (ATLF). ‘Rémunération.’ <http://www.atlf.org/remuneration.html>, accessed June 28, 2010.



中朝新聞報道をめぐるニュースフレーム比較分析



『人民日報』と『労働新聞』における北朝鮮核問題関連報道を中心に

『人民日報』と『労働新聞』の北朝鮮核問題関連報道のニュースフレーム比較分析

国際言語文化研究科 多元文化専攻 メディアプロフェッショナル論講座 博士後期課程1年 朴香花

1. 研究目的

本研究の目的は、中国と北朝鮮の党機関紙である『人民日報』と『労働新聞』において北朝鮮核問題がそれぞれどのようなニュースフレームによって取り扱われているのかを比較・分析することである。

2. 研究背景

理論的背景

問題または問題を定義
(Problem definition)
原因を説明
(Causal interpretation)
道徳的評価
(Moral evaluation)
解決策を提示
(Treatment recommendation)

社会的動向

1990年代：東国からの核脅威
1997年式：韓国との核競争
1998年式：1994年初め、同盟国の韓国から核脅威の伝播へ
1999年式：表面化した北朝鮮核問題
1999年式：第1次核危機
2000年式：第2次核危機、第3次核危機、第4次核危機

学術的動向

90年代に起きた大規模な核とイラン核危機の出現
事件に関する北朝鮮のニュースフレーム比較分析 (Ottawa, 1991; Lee, 2007, p.28)
2000年のイラク戦争に関するスウェーデンと東国の報道におけるニュースフレーム比較分析 (Giallone and Stromback, 2000; Lee, 2007, p.83)

3. 研究課題と研究対象

- ①形式的ニュースフレームにおいて両紙ではそれぞれどう異なるか。
- ②内容的ニュースフレームにおいて両紙ではそれぞれどう異なるか。

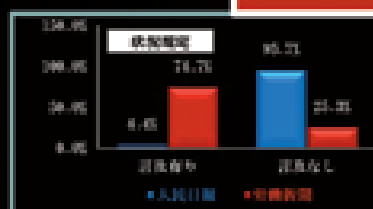
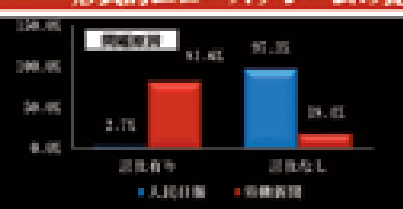
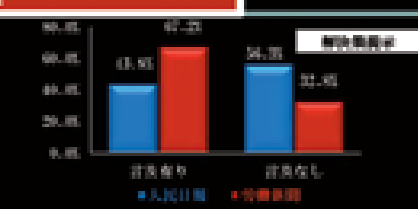
研究対象期間：2000年10月1日～2000年10月30日

研究対象記事：『人民日報』204件、『労働新聞』174件

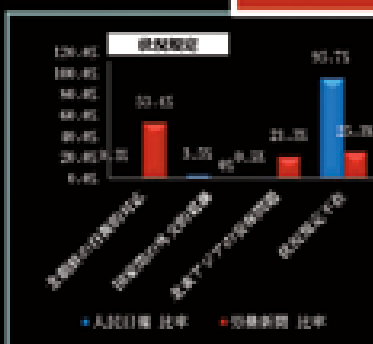
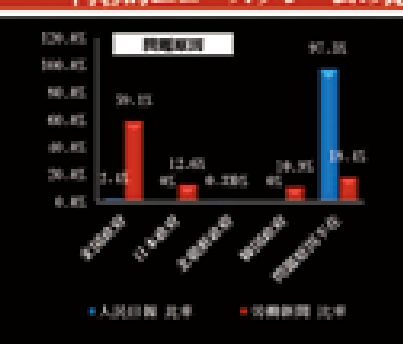
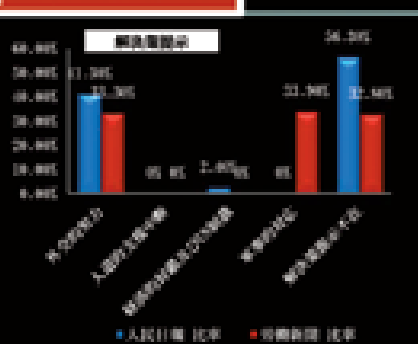
信頼度測定	人民日報	労働新聞
	Cronbach's Alpha	Cronbach's Alpha
信頼度測定	0.871	0.849
問題原因	0.783	0.827
解決策提示	0.738	0.71

4. 研究結果

形式的ニュースフレームの比較



内容的ニュースフレームの比較



5. 結論

本研究によって、北朝鮮核問題をめぐる中国の『人民日報』と北朝鮮の『労働新聞』でそれぞれ異なるニュースフレームで報道していることが明らかになり、両紙におけるニュースフレームの差異から、両紙の報道にそれぞれの特徴があることが明らかになった。『人民日報』では北朝鮮核問題の報道が主に「信頼度測定」のフレームで報道され、北朝鮮の核問題は「問題原因」のフレームで報道され、北朝鮮の核問題は「解決策提示」のフレームで報道されていることが明らかになった。一方、『労働新聞』では北朝鮮核問題をめぐるニュースフレームの差異から、北朝鮮の核問題は「信頼度測定」のフレームで報道され、北朝鮮の核問題は「問題原因」のフレームで報道されていることが明らかになった。このように、北朝鮮の核問題に関する報道の差異は、両紙の報道の傾向にそれぞれの特徴があることが明らかになった。

博論テーマ:「アーネスト・ヘミングウェイと太平洋横断的考察」
A Transpacific Approach to Ernest Hemingway

博論要旨

ヘミングウェイ研究はこれまで欧米文化圏の資料を元に西洋文化の視点で進められてきた。しかしながら、世界中を飛び回った行動の作家、ヘミングウェイと東洋文化および東洋人との接点は決して小さくない。それどころか、文学手帳にも様々な形で影響を与えた痕跡が認められる。これまで大西洋を横断する欧米文化圏の視点で進められてきたヘミングウェイ研究を日本および中国との関係を中心とした太平洋横断的な視点で問い直し、よりグローバルな形でヘミングウェイ像を捉え直すのが本論文の博士論文が目指すところである。

序章
太平洋横断的考察の意義
ヘミングウェイとアジアの歴史的視点

第1章
酒気帯びの国際友人のベル・ゾナーとヘミングウェイの交際
（1921年10月〜1922年10月の交際）

第2章
大恐慌期イリノイ州エバンスタウンと『待つと持たぬ』
と『ニッキー』の交際（1923年〜1924年）

第3章
二つのユニバーサル・アーツ・センター
— Hong Kong & Chicago for Two World War II Writers —

第5章
『戦場の死』に準拠されたヘミングウェイのレイク・エドナ — 戦時中における作家の活動の考察 —

第6章
文部省特選映画『老人と海』 — 戦時中における作家の活動の考察 —

終章

本発表の概要

本論文は発表者が追及してきた一連の「ヘミングウェイ研究」のなかで、特に1920年代のパリで書きヘミングウェイが出会った日本人画家の存在に焦点を当てて(資料1-①②)、その環境について考察する。近年公表された様々な資料から、日本人画家の一人は当時エヴァンスタウンのアリスで養育されていた前南無家久米十郎であることが明確視されている(図1, 2, 3)。
2009年に出版された増補版『移動愛国語』の「秘かな楽しみ」(Secret Pleasure)という章には、カンザス・シティ・スター紙の特派員記者として働いていたヘミングウェイが記者報道と完全に決別する際(図4)、「(自分)久米を告ぐ」日本人画家たちの芸術的スタイルに魅惑されている様子が描かれている(資料1-③④⑤⑥)。彼らのなかには長い髪型を模倣することで記者コミュニティから敬愛して尊敬されようとするもの、そしてこのことが互いに同じ髪型の長髪になるというヘミングウェイ自身のまじに「秘かな楽しみ」を引き出しているのである(資料1-③④⑤⑥)。

こうしてみると、最近になって公表された章「秘かな楽しみ」の記述は、作家生涯の記者ジョセフ・パーズを主人公とする『日はまた昇る』(1926) (資料2-①②③④⑤⑥)の同作品と類似性をもつ。中央に、執筆時期の異なる二つの作品は、「秘かな楽しみ」という一つの物語線によって接合することが可能となる。こうしてである長大な作品は「白人社会における既存の価値観、商業への批判と破壊」をテーマにした記者が作家になるまでを扱った一つの物語として再構成される。これにより、それぞれの主人公ジョーとパーズが異なる異なる同一人物として解釈する視点が新たに提供されるのである。

それらの視点で眺めると、『エデンの園』においてキャサリンの一方的な側面行為の犠牲者として描かれているデヴィッド自身も日本人画家が持つ異質性を両者の価値観打開の手段として用いてきた当事者となる。20世紀前半の米国における日本人画家との出会いは、ヘミングウェイ自身の作家転身においても、作品解釈においても重要な意味があるのだ。

第4章 『日はまた昇る』と『エデンの園』を繋ぐ 長髪の日本人芸術家たち 国際言語文化研究科国際多元文化専攻 D3 横沢秀郎

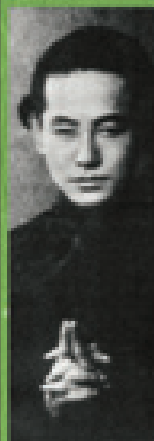


図1 久米十郎 (1922?)



図2 電報通と久米 (1923年10月・東京朝日新聞(画))



図4 作家へ転身するころのヘミングウェイ(1923)

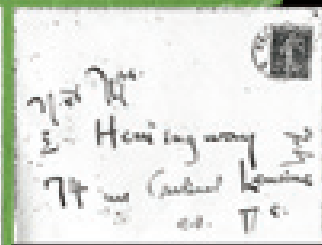


図3 久米がヘミングウェイの髪に似てた、作家の髪型状 (1923)

資料1

You could not go over to the right bank with your hair cut like one of ①these wonderful looking Japanese nobleman painters who were friends of Ezra's. ... After three months you would have a good start on the sort of hair cut ②Ezra's wonderful Japanese friends had and your right bank friends would think of you as damned.

I never knew just what it was that you were supposed to be damned to buy after four months or so you were considered damned to something worse. I enjoyed being considered damned and ③my wife and I enjoyed being considered damned together.

Once we were back from Canada where I had decided that I would do ④no more newspaper work even if I starved and we lived as savages. ... We were free people now in Paris and I did not have to go on assignments.

"And ⑤I'm never going to get a haircut," ...

"Not if you don't want, Fatie [ヘミングウェイの資料]."

"Do you remember the ⑥three Japanese painters at Ezra's?"

"Oh yes, Fatie, they were beautiful but that would take an awfully long time."

"⑦That was the way I always wanted it."

"We looked at each other and laughed and then she said one of the secret things."

"⑧I thought maybe it could be the same as mine."

"Maybe four months to be the same."

"⑨Other people would think we are crazy." (A Moveable Feast: The Annotated Edition 134-137)

資料2

"The cut," David. "I don't think I've had a haircut in a month."

"①Please make it the same as mine," Catherine said.

"But shorter," David said.

"No, ②Please just the same." (The Garden of Eden 81-82)

"So that's how it is," he [David] said to himself. "You've done that to your hair and ③had it cut the same as your girl's and how do you feel?" He asked the mirror. "How do you feel? Say it."

"You like it," he said.

He looked at the mirror and ④it was someone else he saw but it was less strange now. (The Garden of Eden 84)

参考文献

- Hemingway, Ernest. *Selected Letters*. Toronto: The Complete Hemingway Star Publishers, 1958-1959. Ed. William White. New York: Scribner's, 1995.
- . *Ernest Hemingway: Selected Letters 1917-1961*. Ed. Carlos Baker. New York: Scribner's, 1969.
- . *The Letters of Ernest Hemingway 1907-1961*. Ed. Sandra Gandy and Robert W. Fogarty. Cambridge: Cambridge UP, 2011.
- . *A Moveable Feast*. New York: Scribner's, 1954.
- . *A Moveable Feast: The Annotated Edition*. New York: Scribner's, 2009.
- . *The Garden of Eden*. New York: Scribner's, 1986.
- . *The Sun Also Rises*. New York: Scribner's, 1925.

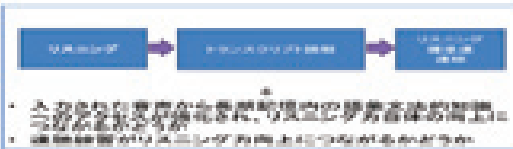
速聴トレーニングによるリスニングの全体的処理能力と分析的処理能力の促進
名古屋大学国際言語文化研究科高専人コース M2梶浦真由美

威果

2月にリスニングがトレーニングが実施
3月TOEIC受験予定と結果

연도	연도	연도
2010	2011	2012
2013	2014	2015
2016	2017	2018
2019	2020	2021

研究課題



実験手順

● 2013 年 12 月 1 日起实施

- [illegible]

結果 1

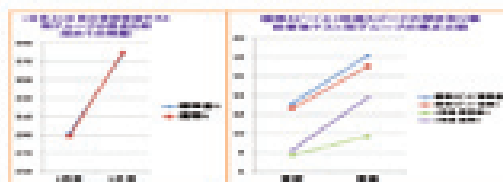
© 2004 by John Wiley & Sons, Inc. All rights reserved. This publication is a U.S. Government work and, as such, is in the public domain in the United States of America.



附錄八——2006年台灣與香港學風比較

1. 1994年1月1日以前，在北京市行政区域内，从事生产、经营活动的个体工商户，其应纳税额按照《北京市个体工商户定期定额征收办法》的规定执行。

結果 2



● 學 期 上 半 學 期 的 學 期 考 試 平 均 分 數

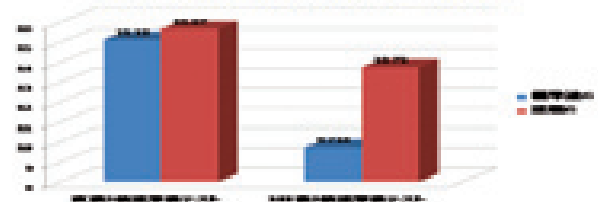
- | 2019年1-6月主要经济指标完成情况 | | | |
|---------------------|----|-----------|-----------|
| 指标名称 | 单位 | 2019年1-6月 | 2018年1-6月 |
| 地区生产总值 | 亿元 | 100.00 | 95.00 |
| 固定资产投资 | 亿元 | 50.00 | 45.00 |
| 社会消费品零售总额 | 亿元 | 30.00 | 28.00 |
| 一般公共预算收入 | 亿元 | 15.00 | 14.00 |
| 一般公共预算支出 | 亿元 | 20.00 | 19.00 |

● 事關影響千人之健康
● 凡一不慎，則傷及上萬人之健康

1. 求取 100 以内所有质数并输出
- ```
var arr = []
for (var i = 2; i < 100; i++) {
 for (var j = 2; j < i; j++) {
 if (i % j === 0) continue
 }
 arr.push(i)
}
```
2. 求取 100 以内所有质数并输出
- ```
var arr = []
for (var i = 2; i < 100; i++) {
  if (i % 2 === 0) continue
  for (var j = 3; j < i; j += 2) {
    if (i % j === 0) continue
  }
  arr.push(i)
}
```
3. 求取 100 以内所有质数并输出
- ```
var arr = []
for (var i = 2; i < 100; i++) {
 if (i % 2 === 0) continue
 for (var j = 3; j < i; j += 2) {
 if (i % j === 0) continue
 }
 arr.push(i)
}
```

### 結果 3

© 2006 Blackwell Publishing Ltd, *Journal of Internal Medicine* 260: 105–112



doi:10.1017/S0022292412001007 Printed in the United Kingdom

© 2007 The Authors  
Journal compilation © 2007 Blackwell Publishing Ltd

## 考察

リスニング認知処理にかかる時間 2000年10月10日現在

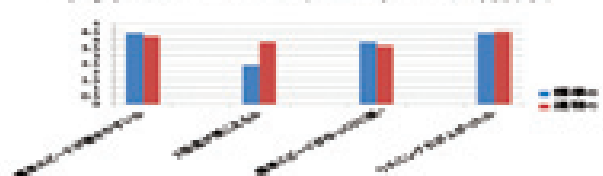


運動では全体的処理によりシフトし、分析的処理速度を上げなければならない。

## 結論

1. マスニングオケレール組合乗点の4位乗と5位乗の乗点間を比較  
→マウスクリック・触覚刺激両方でマスニング練習をすることにより入力された音声から読取文法知識へのアクセスが強化できたかを確認  
(グループ間での有意差無し)
2. マスニングオケレールの組合乗点の触覚乗をそれぞれのグループで比較  
→連続練習のマスニングが促進の効果を確認  
(グループ間での有意差無し)
3. 両グループの4位の触覚乗乗点と音読乗点「4」での練習の乗点を比較  
→音読の音声と意味内容、文法知識触覚「4」アクセスする処理が可能かどうかを確認  
(両群の音読乗点「4」はグループ間の有意差無し)
4. 両グループの音読乗点「4」での乗点前テストと乗点後テストの乗点間を比較  
→連続練習の全体的処理能力、分析的処理速度促進の効果を確認  
(グループ間での有意差無し)

#### ■グループのアンケート結果



## 2011年度提出修士論文題目一覧

### 日本語文化専攻

| 氏 名                      | 題 目                                                                       |
|--------------------------|---------------------------------------------------------------------------|
| 今 澤 ひろ子                  | 若者の言語使用における接続助詞「し」の言いさし文について                                              |
| 宮 地 優 樹                  | 日本近代における愛玩犬の扱われ方                                                          |
| 安 蕙 蓮                    | 韓国語日本語学習者による授受表現の習得について - 授受補助動詞「～(し)てもらう」に焦点を当てて -                       |
| 宇佐美 恵 子                  | 添加型接続詞「それで」「で」の指導に関する実験的研究 - 明示的な文法説明・インプット強化・インプット洪水の効果 -                |
| 大 谷 真 里                  | 継子いじめ譚における父親の役割について - 『落窪物語』を中心に -                                        |
| 季 超                      | 欠落性のある女性を物語る「僕」の語り - 『ノルウェイの森』について -                                      |
| 岸 晴 苗                    | スリランカ人日本語教師の作文評価行動に関する研究                                                  |
| 侯 宝 文                    | 中国語を母語とする日本語学習者による日中同形同義漢字語の習得 - 品詞性を中心に -                                |
| 近 藤 行 人                  | 日本とウズベキスタンにおける論証文の比較 - 対照修辭学的観点から -                                       |
| 曾 琬 婷                    | 中国語母語話者における有対他動詞の受身表現と自動詞の使い分けについて                                        |
| 滝 理 江                    | 「忍耐」を表す動詞の意味分析                                                            |
| 富 田 真知子                  | 日本語学習者による格助詞「に」の修得メカニズム                                                   |
| 福 富 麻 子                  | 心象風景を表す形容詞の意味分析 - 「穏やか」「安らか」「静か」 -                                        |
| 二 口 和紀子                  | 第二言語習得におけるワーキングメモリが習熟度に与える影響 - 個人差要因としての言語適性の観点から -                       |
| BULAEVA Maria Eduardovna | ロシア人日本語学習者の依頼に対する断り - 場面の意識の度合いと断りストラテジーの選択に影響する要因 -                      |
| 方 美 花                    | 中国朝鮮族と日本人の依頼表現の使用に関する対照言語学的研究 - 比較文化語用論(Cross-cultural Pragmatics)の観点から - |
| 関 ソ ラ                    | 現代日本語における「異常」を表す形容詞の意味分析 - 「おかしい」を中心に -                                   |
| 孟 祥 冰                    | 「受動型～てもらう」構文の日中対照研究                                                       |
| 森 仁 美                    | 口頭発表におけるモニタリングの基準の変容 - 意識化、精緻化を促す活動を通して -                                 |
| 山 本 かおり                  | JSL児童の算数文章題解決過程におけるつまずき - 割り算の文章題を中心に -                                   |
| 羅 梓 方                    | 日本語の「もと」と中国語の「下」「旁」の空間的用法に関する対照研究                                         |
| 劉 曉 麗                    | 福沢諭吉の実学思想について - 『西洋事情』から『学問のすすめ』まで -                                      |

## 国際多元文化専攻

| 氏 名          | 題 目                                                                                                                                                        |
|--------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 加 藤 淳        | バッシングを巡る新聞・週刊誌報道の分析<br>－言説分析を用いたバッシングの社会的意義の考察－                                                                                                            |
| 船 田 枝 里      | Die andere Seite des Historikers Gerhard Ritter und die Freiburger Kreise:<br>warum hat er an der Widerstandsbewegung gegen das Dritte Reich teilgenommen? |
| 杜 娟          | 林徽因に関する一考察                                                                                                                                                 |
| 根 本 峻 瑠      | The Revival of the Czech Language under the Late-Habsburg Monarchy                                                                                         |
| 野 村 るみ子      | Designing Materials for Japanese University Students: Women's Literature in the EFL Classroom<br>Women's Literature in the EFL Classroom                   |
| 朴 香 花        | 中朝新聞報道をめぐるニュースフレーム比較分析<br>－「人民日報」と「労働新聞」における北朝鮮核問題関連報道を中心に－                                                                                                |
| WONG Yee Lee | The Role of Public Service Broadcaster in Natural Disaster Management.<br>Lessons learnt from Japan's experience and recommendations for Malaysia.         |
| 何 思 穎        | 朝日新聞と沖縄タイムスによる沖縄少女暴行事件の報道について<br>－機能文法と批判的言説分析から－                                                                                                          |
| 加 川 華 子      | Effects of Word Imageability and English Proficiency on the Process of L2 Translation                                                                      |
| 志 賀 奈月美      | The Allegorical Imagery of Clothes and Behaviors in The Chronicles of Narnia                                                                               |
| 趙 静          | 莫言と大江健三郎の文学における救済                                                                                                                                          |
| 仲 田 桂 祐      | 2011年名古屋市長選挙に関するニュース番組の内容分析<br>－テレビ選挙報道に関する考察－                                                                                                             |
| 中 村 恵 子      | Integrating Focus on Form in Teaching Plans for English for Engineers                                                                                      |
| 南 貴 大        | 2011年名古屋市長選に関する新聞報道の研究<br>－主要5紙による内容分析から－                                                                                                                  |
| 森 友 佳        | 現代汉语语气助词的时体表达功能研究<br>－以“的”“了”“呢”“来着”为中心－                                                                                                                   |
| 劉 文 昭        | 中国人若者の韓国人に対するイメージ形成に関する研究<br>－80後のインターネット利用による影響を中心に－                                                                                                      |
| 渡 辺 悠 平      | 地域活性化をねらいとする文化事業と一般市民との関係構築を促すドキュメンタリー映像の制作<br>[コンテンツ制作]                                                                                                   |

## 2011年度提出博士論文題目一覧及び要旨

| 氏 名                   | 題 目                                             |
|-----------------------|-------------------------------------------------|
| 松 浦 由美子               | 追悼する身体 ―現代日本社会における中絶の主体とフェミニズムの政治―              |
| 古 川 智 樹               | 日本語母語話者と日本語学習者のあいづちの使用と相違                       |
| 廖 紋 淑                 | コーパスを利用したアスペクトを表す複合動詞の記述的研究                     |
| 加 藤 恵 梨               | 感情を表す形容詞の意味分析                                   |
| 大 西 美 穂               | 日本語存在・所有表現の認知言語学的研究                             |
| 魏 志 珍                 | 日本語の談話における視点の一貫性と言語理解・言語運用との関わり ―台湾人日本語学習者を中心に― |
| 磯 部 美 里               | 中国・西双版纳タイ族における出産の医療化と女性たちの選択                    |
| TAYLOR Rebecca Louise | 英語話者による日本語の語アクセントの習得                            |
| 田 村 真奈美               | 女性とミッション——1780～1860年の英国における宗教的使命感と女性の役割         |
| 松 本 靖 彦               | ディケンズの想像力にみる増殖と繁茂                               |
| 魏 則 能                 | 儒学思想における貞節観と貞節牌坊                                |
| 王 艷 珍                 | 夢と詩を織り成す開拓者 ―『嘗試集』、『新体詩抄』を中心に―                  |

## 『中国・西双版纳タイ族における出産の医療化と女性たちの選択』

磯部 美里 (国際多元文化専攻 多元文化論講座 博士後期課程 2012 年修了)

本研究は、中国雲南省に位置する西双版纳タイ族自治州に居住するタイ族の出産を事例として、出産の医療化のなか、出産を担う女性の身体が、国家の政策や社会変容、他民族との交流の中でいかに扱われ、解釈されてきたのかについて考察するとともに、出産に見られる女性の選択に注目し、それがいかなる意味を持つのかについて検討したものである。

本研究では、フィールドワークで得た資料をもとに、タイ族の出産を分析したが、その際、女性の身体と文化との関係性に注目した。出産の医療化のなかで、出産における女性の身体がいかに扱われ、解釈されるのかは文化の如何によるものであり、変化のプロセスにある文化に応じて、出産もまた変容していく。しかしながら、文化を通して、出産における女性の身体の扱い方や解釈のされ方が規定されるとしても、身体の担い手である女性の選択や行動もまた既存の文化に対して変化の契機をはらんでいるのではないだろうかというのが本研究の仮説である。

序章において、本研究の意義と目的を述べた後、第一章では、タイ族の伝統的な出産のあり方を詳述した。まず、タイ族の産婆は主に3つのタイプー志願型産婆、世襲型産婆、育成型産婆ーに分類できることを指摘し、さらに、志願型産婆(「男性産婆」)に対し考察を行った。結果、伝統的な出産において必要とされる知識やその継承方法が上座仏教の信仰と密接な関わりを持っていることがわかった。

第二章では、世襲型と育成型の産婆に焦点を当て、その成立背景をたどり、第三章では、自宅出産における産婦、出産介助者、立会い者の関係性を取り上げ、異なる出産介助者による相違を分析した。

第四章では、計画出産政策という国家による身体管理のなかで、タイ族女性が自らの身体をどのようにコントロールしているのかについて避妊状況から考察し、第五章では、西双版纳における近代医学に基づく医療施設の増加と病院出産の普及プロセスについて明らかにするとともに、タイ族女性たちの病院出産での様子やその特徴について述べた。

第六章では、産褥期の食物禁忌を女性たちがどのような理由のもとで実践しているのかについて検討し、第七章では、産褥期の終わりをあらわす「名付け式」とそこでよまれる祝詞の分析を通して、タイ族社会において身体がいかに解釈・定義され、出産を担う女性の身体はどのように見なされているのかについて論じた。

終章では、序章で提示した仮説に基づき、本研究で明らかとなった西双版纳タイ族の事例を振り返り、身体と文化との関係

性について筆者の見解を提示した。出産における女性の身体は、その時々で必要、重要とされる知識や規範に応じて、複合的な文化のなかに置かれ、他者との関係性の中で扱われてきた。それは時として近代医療に基づく解釈であったり、あるいは「タイ医学」に基づく解釈であったりする。さらには、人口管理の対象であったり、再生産行為の担い手であったりもする。このような意味においては、女性の身体は社会的に構築されるものであり、つねに文化によって産出されるものである。

しかしながら、本研究で検討したように、女性の選択は、既存文化による解釈や方法の枠だけにはおさまらない「新たな文化のあり方」を生み出している。いいかえれば、文化によって「産む性」と見なされる女性の身体もまた、文化を変容させるアクションをつねに起こし続けていることが指摘できる。

# 日本語存在・所有表現の認知言語学的研究

大西 美穂 (国際言語文化研究科学術研究員、日本語文化専攻現代日本語学講座 博士後期課程 2012 年修了)

## 1. 本研究の目的

日本語存在表現は「ある」「いる」とその否定の形式「ない」「いない」を用いた表現とする。日本語存在表現は場所、存在、所有の概念を表す以下の3種類に大別される。

### (1) 机の上にバナナがある。

機能：ある場所に存在物を位置付ける。

構造：場所句ニ＋存在物ガ＋存在動詞

### (2) お化けなんて本当はいない。

機能：位置付けとは関係なく、ある物の存在の有無を述べる。

構造：存在物ガ＋存在動詞

### (3) 太郎は財産がある。

機能：ある所有者に関連付けられる所有物が存在することを述べる。

構造：所有者ハ＋所有物ガ＋存在動詞(所有動詞)

本研究の目的は、以下の3点である。

- i 上述の(1) - (3)のような意味拡張を動機付ける認知的な要因を考察する。
- ii 目的(i)の特徴記述を手がかりに、より複雑な構造を持つ存在表現を分析する。
- iii 日本語存在文の分類を援用した対照研究により、英語所有文を考察する。

## 2. 研究対象と射程

主に日本語存在表現を研究対象としたが、英語所有文との対照研究も行った。現代日本語の共時的な研究であるが、類型論、通時研究の成果を取り入れた。

日本語の存在動詞については、「ある」「いる」および、その否定形を使用して構築された構文一般の総称を「存在表現」とし、この存在表現で表しうる概念を体系的に考察した。

英語所有文については、叙述所有文と呼ばれる動詞haveを用いた所有文を主な研究対象とし、日本語存在文との対照研究を行った。

## 3. 考察方法

本研究はこの認知文法の考え方の妥当性を実証できるような考察を行うことを目指すし、統語論、意味論、語用論として峻別されやすい分野の関連付けを目指す立場に立つ。

- i 文法：動詞の項構造のレベル、構文文法のレベル、情報構造のレベル
- ii 意味：存在概念、場所概念、および所有概念。これらに共通する原型的概念として、包摂概念、隣接関係の概念、全体-部分関係の概念などの非対称的で階層的な概念構造
- iii 運用：概念化を行う主体の存在。存在表現の文構造を利用した談話標識や、談話におけるトピックの階層など

iv (i) - (iii)の関連付けを行った。(i)と(ii)は、形式と意味の対応を考察するもので、記号的文法観(symbolic view of grammar)に基づいた。(ii)と(iii)は言語使用と意味の連続性を主張するもので、動的な使用依拠モデル(dynamic usage-based model)に基づいた。

## 4. 分析

第1章で先行研究、第2章では認知言語学の理論的基盤を概観した。第3章において、第1、2章から導かれる場所、存在、所有の概念に対応する存在表現の文法構造、意味、機能の記述を行い、存在表現の詳細な分類を提案した。

この分類を基盤に第4章および第5章では、複文構造を持つ存在表現の分析を行った。

(4) 太郎は仕事に寝てしまったことがある。

(5) 今日は2人分の仕事をした。忙しかったこともあるが、太郎が仕事に寝てしまったこともある。

(6) ある時、太郎が仕事に寝てしまったことがあります。

(4)から(6)の例には「ことがある」という形式が含まれるが、それぞれの解釈は異なる。(4)は、経験を表すパーフェクトとされてきたものである。(5)は前文脈の事実に対してその理由を挙げるために使われている。(6)は(4)と似て経験を述べているが、そのことがこれまでに何度かあるというパーフェクトの機能ではなく、特定の記憶内容を談話に持ち出すための標識となっている。

従来の研究では、経験を表す「ことがある」という複合的な単位として分析されてきたこの表現を、存在文の複文として分析すると、(4)は、(3)の所有文と同じ構造、機能を持つことが分かる。同様に、(5)、(6)は(2)の存在文の一種であり、それぞれ先行研究でリスト存在文、初出導入文と呼ばれてきた存在文に相当する。

第6章では固有名詞に「のこと」が後接し存在文の項となる「太郎のことがある」というような存在文、第7章では存在表現に準じる表現を取り上げた。さらに第8章、第9章では英語所有文のうち、例外的な構造を持つと分析されてきた2種類について、日本語存在表現との対照研究を行った。

## 5. 本研究の主張と結論

日本語存在表現は、場所、存在、所有の概念領域を中心とする複数の概念を表示できる表現であるが、用法の広がりをも動機付ける要因は、人間が外界の存在物を認識する方策として用いる認知能力である。本研究では階層を成す概念の各タイプと存在表現の個々の用法との対応を論じ、この議論から存在表現の体系的な分類ができることを示した。

本研究ではさらに、複文の存在文や所有文、あるいは談話標識化した存在文や所有文が、基本的な存在文や所有文の文構造を利用していることを明らかにした。

## 感情を表す形容詞の意味分析

加藤 恵梨 (日本言語文化専攻 現代日本語学講座 博士後期課程 2009 年満期退学)

本研究では、現代日本語の語義の分析・記述、および類義語分析の必要性から、辞典や先行研究で明らかにされているとはいいたい感情を表す形容詞の意味について分析し、個々の語の意味と、類義語との意味の違いを記述した。

まず、感情を「喜・怒・哀・怖・恥・好・厭・昂・安・驚」という十類に大別し、それらの感情を表す形容詞の中から、辞典類や先行研究で個々の意味や類義語との意味の違いが十分に記述されているとは考えられない次の19語を考察対象とした。

「喜」類…「おもしろい、おかしい」

「哀」類…「かなしい、さびしい、わびしい」

「怖」類…「こわい、おそろしい」

「厭」類…「いや、きらい」、「うっとうしい、わずらわしい、めんどくさい」、「つらい、くるしい」、「せつない、やるせない」

「昂」類…「じれったい、もどかしい、はがゆい」

上の19語の意味を記述するという目的に向けて、第2章では多義語の複数の意味を関連づける重要なメカニズムである、「フレーム」と「比喩(メタファー、メトニミー、シネクドキー)」について概観した。

次に第3章では、形容詞についての先行研究を整理・検討した。

第4章から第8章では、感情を表す形容詞の意味分析を行った。以下では紙面の都合上、各語の意味のみ記述する。

まず、第4章では「喜」の感情を表す「おもしろい」と「おかしい」を分析し、次のように意味を記述した。

「おもしろい」

別義1:〈新しい発見に〉〈気持ちが引きつけられる〉〈さま〉

別義2:〈展開が予測できない事柄に〉〈夢中になる〉〈さま〉

別義3:〈思い通りの結果が得られ〉〈気持ちが満たされる〉〈さま〉

「おかしい」

別義1:〈ある物事が通常の状態と異なっていることに〉〈笑いがこみあげてくる〉〈さま〉

別義2:〈ある物事が通常の状態と異なっていることに〉〈正常ではないと感じる〉〈さま〉

続いて、第5章では「哀」の感情を表す「かなしい」「さびしい」「わびしい」を分析し、次のように意味を記述した。

「かなしい」:〈思いと異なる良くない事態に〉〈気持ちが沈む〉〈さま〉

「さびしい」:〈求めている物事が得られないことに〉〈気持ちが満たされない〉〈さま〉

「わびしい」:〈ある物事が一般的な水準より劣っていることに〉〈気持ちが満たされない〉〈さま〉

次に、第6章では「怖」の感情を表す「おそろしい」と「こわい」を分析し、次のように意味を記述した。

「おそろしい」

別義1:〈深刻な打撃を与える物事を〉〈避けたいと強く感じる〉

〈さま〉

別義2:〈物事がもつ普通では考えられないような威力に〉〈驚異を感じる〉〈さま〉

別義3:〈普通では考えられないほど〉〈程度が非常に高いと感じる〉〈さま〉

「こわい」:〈良くない事態を引き起こす物事を〉〈避けたいと感じる〉〈さま〉

第7章では「厭」の感情を表す「いや、きらい」、「うっとうしい、わずらわしい、めんどくさい」、「つらい、くるしい」、「せつない、やるせない」を分析し、次のように記述した。

「いや」:〈不快な物事を受け入れることができず〉〈拒みたいと感じる〉〈さま〉

「きらい」:〈何らかの理由によって、ある物事に良くない印象を抱き〉〈避けたいと感じる〉〈さま〉

「うっとうしい」:〈適切と感じる範囲を超えている物事を〉〈排除したいと感じる〉〈さま〉

「わずらわしい」:〈心理的に負担である物事に〉〈かかわりたくないと感じる〉〈さま〉

「めんどくさい」:〈ある行為に関心がもてず〉〈その行為をしようという気持ちが生じない〉〈さま〉

「つらい」

別義1:〈身体に負担がかり〉〈耐えられないと感じる〉〈さま〉

別義2:〈望みと異なる良くない事態に〉〈耐えられないと感じる〉〈さま〉

「くるしい」

別義1:〈身体内部の異常に〉〈耐えられないと感じる〉〈さま〉

別義2:〈良くない状況となり〉〈状況を好転させるのが困難であると感じる〉〈さま〉

「せつない」

別義1:〈思いが叶わない状況になった後も〉〈思いを断ち切れずにいる〉〈さま〉

別義2:〈容易に願いが叶わない状況において〉〈どうにかして願いが叶ってほしいと思う〉〈さま〉

別義3:〈困難な状況においても、懸命に立ち向かう他者の姿に〉〈胸があつくなる〉〈さま〉

「やるせない」:〈受け入れがたい事態に〉〈どうすることもできず、気持ちのやり場がない〉〈さま〉

第8章では、「昂」の感情を表す「じれったい」「もどかしい」「はがゆい」を分析し、意味を記述した。分析の結果は、紙面の都合上割愛する。

最後に、第9章では本研究のまとめを述べた。

# 日本語の談話における視点の 一貫性と言語理解・言語運用との関わり—台湾人日本語学習者を中心に—

魏 志珍 (日本言語文化専攻応用言語学講座、博士後期課程 2012 年修了)

談話は、意味的なつながりを持つ複数の文の連鎖によって構成されたまとまりのある集合体である。その全体的なまとまりに関与する一つの要素として視点が挙げられる。本論文では、中国語を母語とする台湾人日本語学習者を対象に、視点の一貫性が日本語の談話における言語理解と言語運用にどのように関与しているかについて、テキストの読み (reading) およびその産出 (writing) の両観点から検討を行い、研究1と研究2を実施した。

## ・研究1－読みの観点からの研究

研究1は、視点の統一度が日本語母語話者 (実験1) と日本語学習者 (実験2) の日本語テキストの読みにどのように影響するかを検討することを目的としたものである。具体的には、テキストの読み処理に焦点を当て、読み処理の過程を即時に反映できる固定窓式の自己制御読み実験と読後の内容理解を測定する読解テストを用いて、視点の統一度の異なる複数のテキストを読む場合の理解度と処理の迅速さを比較検討した。

実験1では、同じ内容だが視点の統一度に高低の対立のあるテキストを『自転車』、『道案内』、『犬助け』の3種類 (1対ずつの合計6テキスト) 用意して、日本語母語話者を対象に実験を行った。実験2では、実験1と同様のパラダイムにより、『自転車』と『犬助け』の2種類のテキスト (1対ずつの合計4テキスト) を用いて、日本語学習者を対象に実験を行った。

実験1と2の結果から、視点の統一度の高低は日本語母語話者と日本語学習者のテキストの内容理解に影響を与えていないことがわかった。また、『自転車』と『犬助け』のそれぞれについて、視点の統一度の高いテキストと低いテキストの全体の平均読み時間に見られた違いから、日本語学習者が受けた視点の統一度による影響は日本語母語話者ほど強くなかったことが示唆される。さらに、『犬助け』における受身表現を含む個々の文の読み時間の比較から、日本語母語話者は受動態の統語構造から生じた処理負荷が視点の統一によって軽減されることがあるのに対し、日本語学習者はそのような傾向が顕著ではなかったことが示された。このことから、日本語学習者が受けた統語構造の複雑さによる影響は日本語母語話者より大きいことが示唆される。

以上述べてきた研究1の結果をまとめると、視点の統一度とそこから生まれる統語構造の複雑さは、いずれも日本語母語話者と日本語学習者の読みに影響を及ぼすものの、その影響の度合いは一樣ではなく、調査対象者の特性によって異なることが明らかとなった。

## ・研究2－産出の観点からの研究

研究2は、日本語母語話者 (調査1) と日本語学習者 (調査2) を対象に、視点を意識させることがそれぞれの事態描写における視点の一貫性の維持にどのような効果をもたらすかを検討することを目的としたものである。具体的には、ストーリー構築法を利用して、事態を描写する際に用いられる視点表現に着目して、その使用傾向と視点の置き方および日本語の熟達度との関連性を検討した。

調査1では、8コマの自作漫画を調査材料とし、「A－制限なく自由に書く」と「B－特定の人物になったつもりで書く」という2種類の指示を用意して、AとBの2グループに分けた日本語母語話者を対象に調査を行った。調査2では、日本語学習者を日本語能力によって上位群と下位群に分けた後に、さらにAとBの2グループに分けて、調査1と同じ調査材料と指示によって調査を行った。

調査1と2の結果から、自由に書かせる場合では、日本語学習者 (特に下位群) は日本語母語話者に比べ、感情表現の使用が多く、登場人物の内面を直接描写する傾向が顕著であることがわかった。また、自由に書かせる場合に、日本語母語話者と日本語学習者では、同じ固定視点であっても〈視座〉を据える人物が異なり、日本語学習者は出来事を起こした動作主体の〈視座〉から描写する傾向が強いことが認められた。このことは、日本語学習者の事態の捉え方が日本語母語話者と異なっていることを示している。一方、視点を意識させることにより、上位群は視点表現の使用のみならず、視点の置き方においても日本語母語話者と類似する傾向が認められたが、下位群では視点表現の使用が増加する傾向が見られたものの、視点の置き方においては上位群のような日本語母語話者に近づく傾向は認められなかった。

以上述べてきた研究2の結果をまとめると、視点を意識させることは視点表現の使用を促進する効果があるが、必ずしも視点の一貫性の維持に結びつくとは限らないことが明らかになった。視点を意識できたとしても、視点表現の習得が不十分であることにより、日本語母語話者のように適切に用いることができず、結果として視点の一貫性を維持することができない場合もあることが示された。

本論文における以上の分析結果は、これまでのように読みと産出のいずれか一方の観点のみから日本語母語話者と日本語学習者を比較対照するという方法論を通じては得ることのできなかったものであり、今後の視点研究に応用することのできる新たな知見を提示するものと思われる。

## 名古屋大学大学院国際言語文化研究科 年報 Bulletin L&C 2012 vol.4

2012 年 10 月 20 日 発行

編集発行：就職・同窓会委員会

前野みち子（日本言語文化専攻比較日本文学講座教授 / 研究科長）

藤井たぎる（国際多元文化専攻先端文化論講座教授 / 評議員・副研究科長）

田所 光男（国際多元文化専攻多元文化論講座教授 / 副研究科長）

池側 隆之（国際多元文化専攻メディアプロフェッショナル論講座准教授）

伊藤 信博（日本言語文化専攻助教）

楊 韜（国際多元文化専攻助教）

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

URL：<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/>

制作：西濃印刷株式会社

〒500-8074 岐阜市七軒町 15 番地 TEL：(058) 263-4101

